

# 早稲田大学図書館伊地知鉄男文庫蔵

## 『帚木別注』の増補注記（翻刻）

ノット・ジェフリー

### 要旨

本稿は、早稲田大学図書館の伊地知鉄男文庫に所蔵される宗祇『帚木別注』の一伝本（伊地知本）が独自に伝える、大量かつ特徴的な増補注記群を翻刻したものである。



【翻刻】

早稲田大学図書館伊地知鉄男文庫蔵『帚木別注』の増補注記（翻刻）

例言

一、本稿の内容と目的 本稿は、早稲田大学図書館の伊地知鉄男文庫に所蔵される宗祇『帚木別注』の一伝本（以下「伊地知本」）に含まれる大量の増補注記群を翻刻したものである。伊地知本が伝えるこの特徴的な注釈情報を整理するとともに、参照しやすい形でそれを提供することに本稿の目的がある。

一、『帚木別注』の内容と構造 宗祇『帚木別注』（別名『雨夜談抄』）は、『源氏物語』五十四帖の中から帚木卷のみを対象とした、本来一―四項目（伝本系統によって一―三項目）を有する一冊の注釈書で、伊地知本を含む多くの伝本が載せる奥書によれば「文明十七のとしふ月のはしめつかた」（すなわち一四八五年七月初旬）に連歌師宗祇によって纏められたものらしい。先行する『源氏物語』注釈類の多くの例と同様、『帚木別注』の各項目は、解釈対象となる箇所を帚木巻本文から一部抜き書きした（1）引用本文と、その解釈自体を述べた宗祇の手による（2）注記本文からなる。

一、伊地知本『帚木別注』の書誌 伊地知本（請求番号―文庫二〇・四〇〇）は、縦二三・二糎、横一七・三糎の列帖装一冊の写本で、料紙は楮紙、無地の共紙を表裏表紙とし、外題も内題も持たない。十行書きの墨付き六十七丁は前後に遊紙を置かず、全で一筆である。江戸初期の書写と目され、『帚木別注』現存諸伝本の中では古い方に位置付けられよう。また、虫損等はあるものの、比較的保存状態もよい。なお、伊地知本には落丁（二七―一八丁の間

に二丁分ほどか)により三項目分ほど(『帚木別注』第二二～二四項目)の欠落が認められ、原作の一一四項目のうち計一一二項目を伝える写本となっている。また、二丁分の乱丁により、『帚木別注』第一〇一～一〇四項目(前半)にあたる部分(六五～六六丁)は、本来あるべきところ(五七～五八丁の間)から抜けており、第一一三と第一一四項目(墨付き最終丁)との間に貼付されている(つまり、伊地知本『帚木別注』末尾部分の項目順は一〇〇、一〇四(後半)→一二三、一〇一～一〇四(前半)、一一四になっている)。

一、**伊地知本の増補部分** 宗祇『帚木別注』の伝本という性格を有する伊地知本には、宗祇による注記を圧倒するほどの、ほぼ各丁にわたる大量の増補部分をもつという特徴も確認できる。増補部分の掲載方法は(特にその方針が固まったとみえる後半に至るまでの間は)一様でなくそれなりの不統一が認められるものの、行間や余白に付された書き入れの形を取ることは少なく、ほとんどの場合その内容を(ある程度の書き分けを試みながらも)むしろ宗祇作に組み入れたという躰を示している。

一、**増補部分の内容と構造** 大きく分けてこの増補部分は、宗祇『帚木別注』に掲載されなかった帚木巻本文の残り全て、計一〇三箇所を補完した(3) **増補本文**と、現時点において知られる『帚木別注』諸伝本の中でも伊地知本だけが独自に伝える注記群として、計一九九箇所に及ぶ(4) **増補注記**からなる。以上より、伊地知本『帚木別注』の前身は左の通りに纏められる。

(1) 宗祇作引用本文 一一一箇所(本来の一二四項目から三項目ほど脱落した結果)

(2) 宗祇作注記本文 一一一箇所(1)と同じ)

(3) 伊地知本増補本文 一〇三箇所

(4) 伊地知本増補注記 一九九箇所

一、増補部分の項目化 伊地知本においては、増補部分（3）と（4）の情報が本来の『帯木別注』に内包化されている。その掲出方針は二通りある。すなわち、【A】その情報を宗祇『帯木別注』由来の「既存項目」に取り入れる方法と、【B】その情報を「新設項目」に仕立て、その見出し本文の（帯木巻における）順番に従って「既存項目」の間に立項する方法と、そのどちらかを用いて『帯木別注』に組み入れている。この観点から（3）と（4）それぞれの組み入れ方の具体的な内訳を整理すると、左の通りになる。

（3）伊地知本増補本文（計一〇三箇所） 既存項目 二二例 新設項目 八二例

（4）伊地知本増補注記（計一九九箇所） 既存項目 一一四例 新設項目 八五例

なお、伊地知本「新設項目」の中には、（必ず引用本文と注記本文の対からなる）『帯木別注』本来の項目と違って、注記を持たない項目もあれば、複数の注記を持つ項目もある。またその外に、巻頭においては、見出し本文を持たない序に相当する項目もある。

一、『帯木別注』本来の項目の再編 宗祇『帯木別注』に遡る（脱落を除いた）一一一項目のうち、伊地知本においては更に再編が行われている場合もある（例えば贈答歌に対する注釈の場合、宗祇が一つの項目に纏めているのに対して、伊地知本では歌ごとに項目を小分けして立てる傾向がある）。こうした再編の結果、「既存項目」の数に七項目ほどの増加が起こり、伊地知本における宗祇作由来の項目は計一一八項目となる。

一、伊地知本所載項目の総数と類別 前記の通り、『帯木別注』の全一一四項目のうち一一一項目が伊地知本に伝わり、一部の再編を経てその数が一一八項目となっている。一方、伊地知本の増補部分の一部は、この「既存項目」に取り入れられているが、その残りは「新設項目」として仕立てられており、その数は八三項目となっている。したがって、伊地知本の総数は二〇一項目（巻頭の序を除いて二〇〇項目）。

【A】 既存項目 一一八項目（増補本文 二二箇所、増補された注記が一一四例含まれる）

【B】 新設項目 八三項目（増補本文 八二箇所、増補された注記が八五例含まれる）

一、校合の痕跡 増補部分とはまた別に、伊地知本においては校合・修正が行われた箇所が数多く認められる。脱字補入、衍字削除、誤写訂正、異本注記等々、本文と同筆の墨と朱を用いた、多岐にわたる校正作業の跡が随所に窺える。なお、校合に使われた資料については明確な記述がないが、その対象は宗祇作の（1）引用本文と（2）注記本文から（3）増補本文と（4）増補注記まで、伊地知本のあらゆる情報層に及んだと見える。

一、項目の翻刻方針 紙幅の関係で本翻刻は、（4）伊地知本『帚木別注』の増補注記のみを対象とした。一方で略した形でも、伊地知本全二〇一項目の内容と構造、また伊地知本における増補注記全一九九箇所の位置づけ等がなるべく詳しく把握できるように、左のような工夫をした。

(1) 項目番号 冒頭に置かれた序に相当する項目を除き、漢数字一〜二〇〇の通し番号を振って、全二〇一項目を立項した。

(2) 範囲と体裁 項目番号の下のへ〜に、丁数で当項の範囲を記し、また「本行」か「割書」を明記して伊地知本におけるその（元の）書き様の別を示した。

(3) 所収増補注記 丁数等に続けて、当項所収の増補注記をアラビア数字の通し番号で明記した。  
例…増補注記 083〜085 Ⅱ伊地知本増補注記の第八十三番〜第八十五番所収

(4) 項目の構造 項目内容を構成する複数の要素を便宜的に区分けし、丸付き数字①〜④を掲出順に振って、内容の類別を略号で示した。

例…④別 061注 Ⅱ第4の要素に宗祇『帚木別注』第六十一項の注記本文

(5) 本文範囲

①別43引・注      Ⅱ第1の要素に宗祇『帯木別注』第四十三項の引用及び注記本文  
増補注記以外、各項目の本文を省略したが、構成要素それぞれの本文範囲が確認できるように、その下に『帯木別注』の場合は「」内に、増補本文の場合は《》内に、それぞれの本文の冒頭と末尾のみを示した。

一、増補注記の翻刻方針

伊地知本『帯木別注』所載の増補注記を全文翻刻した。所収する項目本文の省略により紙面の文字配置の厳密な再現は叶わないが、利用の便を考慮しつつ、書写情報もなるべく保存されるよう、左のようない工夫をした。

(1) 番号

項目番号と区別しアラビア数字の通し番号を振って、全一九九の増補注記を立項した。

(2) 見出し本文

各注記が対象とする本文箇所を伊地知本より引用し、帯木巻本文の場合はゴシック体で、また宗祇の手による注記本文の場合は（その旨を明記し）明朝体で、それぞれ見出し本文を掲出した。なお、解釈の対象と意図された本文の範囲が不明瞭な場合は、総合的に判断して適切と思われる最小範囲を引用したが、本稿の筆者の判断によることを示すため、その見出しを「」で括った。

例…067<sup>(注)</sup>／うなつく      Ⅱ朱の合点に従った本文掲出

065 「あへなく」      Ⅱ筆者の判断による（最小限の）本文掲出

(3) 『大成』番号

見出しの直下に、参照の便を図って『源氏物語大成 校異篇』の該当する頁と行を（ ）に示した。

例…144 三史五経の（六一⑨）      Ⅱ『源氏物語大成 校異篇』帯木巻の六一頁九行目参照

(4) 範囲と掲出方法

続いて「ハ」に、「イ」丁数による当注記の範囲、「ロ」「本行」「割書」「行間」等の伊地知本におけるその（元の）書き様の別、「ハ」所収する項目における当注記の掲出位置と掲出方法を示した。

例…「三八オ・割書・注④末より」**〓**割書、所収項目第4要素〔帯木別注〕注記の末尾に続く

「二八オ・割書・増①中」**〓**割書、所収項目第1要素（増補本文）の文中に挿入された

「三一オ・本行・増①末より」**〓**本行に書かれ、所収項目第1要素（増補本文）の末尾に続く

(5) 参考

増補注記の掲出事情等が右のような略式の紹介のみでは把握しきれないと判断された場合、その文脈を示すため、例外的に〈参考〉という形で、注記のみならず所収する項目をも一部翻刻した。この翻刻においては、宗祇の手による本文と区別して増補部分をゴシック体とし、更に増補本文を《》で括り、また増補注記をへ〜で括った。

(6) 備考

右のような〈参考〉でその文脈を示しても、増補注記の伊地知本における掲出事情等がなお明白にならないと思われた場合は、更に【備考】という形で必要な説明を添えた。

一、翻字方針

原則として伊地知本の情報を残すような翻字に努めたが、伊地知本の増補注記部分のみを対象としたこともあるため、翻刻に当たって参照の便宜を考慮し、左のような操作を行った。

(1) 改頁と改行

丁変わりを翻刻に反映させず、また改行を全て詰めることとした。

(2) 文字の書き様

原則として伊地知本における割書や本行等の別を再現せず、全項目の体裁を統一し、その元の書き様を前記のような方法で情報として付記した。同じ項目に複数の体裁が用いられた場合のみ（例えば本行中の割書、割書中のさらなる割書など）、割書を以てその位相の区別を残した。



- (3) 振り仮名
- (4) 読み仮名
- (5) 記号・濁点
- (6) 朱墨の別
- (7) 変体仮名
- (8) 旧字・異体字
- (9) 判読不明の字
- (10) 注記の字下げ

例外なく、また可能な限り原本と同じ位置に、全ての振り仮名を再現した。

組版上の限界はあるものの、返り点（レ点・二点等）を全て翻字し、当該写本に近い再現に努めた。

当該の写本で用いられている記号については、例えば合点（ㄨ）、補入記号（。）、見せ消ち（二重取り消し線）等のように翻刻に示し、また濁点を全て翻字した。逆に伊地知本にない濁点は一切付さないものとした。

朱書きの場合は（朱）と注した。

変体仮名はことごとく通行の仮名に改めたが、平仮名・片仮名の別は伊地知本のままにした。概ね通行の字体に改めたが、一部で異体字をそのままにした例もある（「哥」「實」「國」など）。虫損や経年劣化などにより判読が叶わない場合、その範囲を「□」で示した。

伊地知本においては、本来の『帯木別注』に由来する「既存項目」の場合、一冊を通じてその（1）引用本文と（2）注記本文とを後者の二字下げによる掲出をもって区別している。一方の「新設項目」の記し方は様々で、「既存項目」のごとき例もあるが、多くの場合は（3）増補本文を割注相当の字で掲出し、それに対する（4）増補注記を文中挿入のさらなる割注形式としており、字下げを施していない（ただし、「既存」「新設」のどちらにおいても、文中挿入でありながら長文の増補注記が途中から破格的な字下げを施されている例も若干ある）。本翻刻では、全項目にわたり統一して字下げを施さないこととした。

〔注〕

(1) 『帚木別注』の現存伝本は多種多様で、その形態においてのみならず、その立場方針においても写本間の相違が認められる。その分類や整理等を今後の課題とし、便宜的に本稿で「本来の『帚木別注』とするのは、例えば中野幸一編『明星抄 雨夜談抄 種玉編次抄』源氏物語古註釈叢刊第四卷（武蔵野書院、一九八〇）の翻刻で確認できるような本文を指す。

〔付記①〕翻刻にあたって閲覧・撮影・掲載の許諾を賜った早稲田大学図書館に、心より深謝申し上げます。

〔付記②〕本稿は科学研究費補助金（若手研究（21K12939）「戦国期古典学史の基礎的研究―連歌師の源氏学を中心に―」）による研究成果の一部である。

序（二オ〜二オ・本行） 増補注記 001

① 別 001 注（前半）「此巻を…はかりなきなり」

001（帚木巻の年立について）

〔二オ・割書・注①末より余白へ〕

桐壺巻ニハ十二歳マテノ事アルシカラハ三十四十  
五此三ヶ年ノ事ハ物語ニ所見ナシ但桐壺ノ末ノ詞ト  
此巻ノ初ノ段ノ詞ニ三年ノ事ハコモル弄花ニ源氏  
十六歳夏ノ事アリ 此巻ハ序分ニアタルヘシ一部ニ  
カンカフルヘキ心也桐壺巻ハ其前也トアリ

項一（二ウ〜四オ・本行） 増補注記 002〜013

① 別 001 引「光源氏…いひさかなさよ」

② 増補本文《さるはいと…給ひけんかし》

③ 別 001 注（後半）「さて此巻の始…此一巻の序分也」

〈参考 01〉 項一 本文①〜②

① 光源氏名のみこと〜しういひけたれ給ふとかお

ほかなるにいと〜かゝるすき事ともをすゑの世にも  
聞つたへてかるひたる名をやなかさむとしのひ給ひ  
けるかくろへ事をさへかたりつたへけん人の物いひ  
さかなさよ 002 ② 《さるはいといたく世をは〜かりま  
めたち給けるほど 003 なよひかに 004 005 おかしき事はな  
くてかた野の少将にはわらはれ給ひけんかし》

002 「物いひさかなさよ」(三五③)〔二ウ・割書・引①末よ  
り〕

こゝにしも何句ふらん女郎

003 「まめたち給けるほど」(三五④)

〔二ウ・割書・増②中〕

皴シヅメ遊仙箱 皴目シヅメ 同 真立マコト文遠 マコトシキ心

004 なよひかに (三五④) 〔二ウ・行間・増②中〕

弄花ニヒモシスミテヨメリ一禅ハヒ文字濁坎トアリ

005 なよひかに (三五④)

しなやかなる心也

〔二ウ・割書・増②中〕

〔参考02〕項一 本文③

③さて此巻の始に光源氏といふよりかたのゝ少将にはわらはれ給ひけんかしといふまては此物語の作者の。006 詞也是のみならず紫式部か詞所／＼おほかるへし名のみこと／＼しくとは光源氏といふ名はいかめしうとほめたる心也。007 いひけたれ給とかおほかるとは世にその名たかく道のほまれある人をも世ににいひけつならひ也。008 かゝるすき事共を末の世にもきゝ傳てかるひたる名をやなかさむと忍ひ給けるかくろへ事をさへ語つたへけむ人の物いひさかなさよとは源氏の君は好色の人なから。009 おもては實を本として下に色このむ心まし／＼ける也さるによりて世に忍ひ給事を誰か語つたへけんと紫式部かいふなり。010 さるは世をはゝかりまめたち給ひけるほとなよひかにおかしき事はなく交野の少将にはわらはれ給けむかしとは下の心は好色にして上に實をたつ

る故になよひたる所のなき好色の本意にはあらずとかた野の少将はわらはん。式部か思ひてかける也交野の少将の事色／＼の儀侍れと。011 作物語にかたのゝ少将といふあり。012 013 〔英明少将かた野に一宿の事あり或説業平とも云也かたのゝ少将此人は世にも人にもはゝからすきたはめる人なりしかるに光源氏はさやうのすき事などはかくろへしのひ給けるほとにわらはれ給けむかしとはいへる也〕光源氏と交野少将と同時代にあらねとも紫式部か取合てかくいへるなり作物語の人にて作物語の人に對する事おもしろくかける物なりこゝまては此一巻の序分也

006 「此物語の作者の。詞也」〔宗祇注記本文〕

〔二ウ・行間・注③中〕

批判ノ

007 「光源氏といふ名はいかめしうとほめたる心也。」

〔宗祇注記本文〕

〔三オ・行間に割書・注③中〕

花鳥ニ 此發端ノ詞ハ桐壺ノ巻ノオハリノ詞ニヒカル君

トハコマウトノメテキコエツケタテマツレルトイヒ  
ツタヘタルトカケルニウケテイヘル也

〔三オ・余白に割書・注③中〕

008 「世上にいひけつならひ也。」（宗祇注記本文）

〔三オ・行間に割書・注③中〕

イヒケタレ玉フトカトハ花鳥ニハ東宮ノ女御ノ此君  
ヲヨシトモ思ヒ玉ハヌニツキテ其御カタサマヨリア  
ル事ナキ事ニツケテイヒケタレ玉フトカオホカルヘ  
シ弄花ニ名ハコトノシクテ又イヒケタレサセ給ト  
カモオホカリトイフ義ハ勿論也トアリ

009 「源氏の君は好色の人なから。」（宗祇注記本文）

〔三オ・行間・注③中〕

在中将ナトノフルマヒニハカハリテ

010 「おもては實を本として下に色このむ心まし／＼け  
る也さるによりて世に忍ひ給事を誰か語つたへけんと  
紫式部かいふなり。」（宗祇注記本文）

花鳥ニハスキ事トハ好色ノ事ト云説アレトモ此一段  
ノ詞ツ、キサハ見エス光源氏ト云名ヲスキ事トハイ  
フ下ノ詞ニカロヒタル名ヲヤナカサムトイヘルニテ  
キコエタサテシノヒ玉フカクロヘ事トハ源氏ノ君ヲ  
高麗人相セシ事隠密ノ子細ハ桐壺ノ卷ニ見エタカロ  
ヒタル名ハ末ノ代マテノ事ヲ云物イヒサカナキハ今  
ノ世ノ事ヲ申 女郎花ノ哥

011 「。作物語にかたのゝ少将といふあり」（宗祇注記  
本文）

〔三ウ・行間・注③中〕

古き

012 「かた野の少将」(三五⑤)

〔三ウ・行間・注③中〕

弄花ニ私勘 宇多—兵部卿齊世親王—英明家母左中将藏人頭  
從四上 異訓ツネヨシトアリ

013 「かた野の少将」(三五⑤)

〔三ウゝ四オ・本行・注③中〕

英明少将かた野に一宿の事あり或説業平とも云也かたのゝ少将此人は世にも人にもはゝからすすきたはめる人なりしかるに光源氏はさやうのすき事などはかくろへしのひ給けるほどにわらはれ給けむかしとはいへる也

項四 〈五オ・本行〉 増補注記 015

- ① 別 004 引 「しのふのみたれ…しかとゝは」
- ② 別 004 注 「葵の上かたの人…疑心なり」

015 「しのふのみたれにや」(三五⑥)

〔五オ・本行・引①末より〕

在中将の哥の心

項二 〈四オゝ四ウ・本行〉 増補注記 014

- ① 別 002 引 「また中将などにもし給ひし時は」
- ② 別 002 注 「源氏の君此巻…不審なき物にや」

項五 〈五ウ・本行〉 ※増補注記ナシ

- ① 別 005 引・注

014 また中将などにもし給ひし時は(三五⑤)

〔四オ・割書・引①末より〕

項六 〈五ウゝ六オ・本行〉 ※増補注記ナシ

- ① 別 006 引・注

コ、ヨリ双紙ノ詞

項七 〈六オ・本行〉 ※増補注記ナシ

- ① 別 007 引・注

項三 〈五オ・本行〉 ※増補注記ナシ

- ① 別 003 引・注

項八 〈六オゝ七オ・本行〉 増補注記 016

① 別008引 「うちの御ものいみさし…なにくれと」

② 別008注（前半） 「うちの御物…つゝしむ事なり」

③ 別008注（後半） 「なかみさふらひ…入給事也」

〔七オ・本行・増①末より〕

調出也

016 「御ものいみ」(三五⑩)

〔六ウ・本行・注②と注③との間に挿入、本文化〕

類字には神名也とあり此名をかきて身につけぬれは鬼神おかさすといへり又或説物忌といふ鬼三十五丈を四方に居所をかまへて居たる所へは諸鬼神不来候さて物忌といふ名をかりて御夢見などあしき時此事あり帝王御冠に柳を三寸に切てさすなり諸鬼神おそるゝ物也又六日御物忌といへるはなか神の御物いみの御かたゝかひなり

項一〇（七オウ七ウ・本行）増補注記018〜019

① 別009引 「御むすこの君達…きこえ給て」

② 増補本文《あそひ…ふるまひたる》

③ 別009注 「御むすこの…と見えたり」

018 「御とのゐ」(三五⑫) 〔七オ・割書・引①中〕

宿也

019 「若葉に致仕してちしのおとゝといへり」(宗祇注記本文) 〔七ウ・割書・注③末より〕

致仕表とは大臣上表也・前官号致仕大臣  
年表で官をかへすなり

項九（七オ・本行）増補注記017

① 増補本文《めつらしき…給ひつゝ》

017 「てうしいて給ひつゝ」(三五⑬)

項一一（七ウウ八オ・本行）増補注記020

① 別010引 「右のおとゝ…あたるなり」

② 別010注 「頭中将は…といへるなり」

020 「あたら」(三二六②) 「七ウ・割書・引①末より」

秋といへはよそにそ聞しあたら人の我を

項一二(八オ・本行) 増補注記 021

① 増補本文《さとにても…まはゆくして》

021 「まはゆく」(三二六②) 「八オ・割書・増①末より」

目もあてられぬ心なり

項一三(八オ→一〇オ・本行) 増補注記 022→023

① 別011引 「君の出入し…たちをくれす」

② 増補本文《いつくにて…きこえ給ける》

③ 別011注 「是は源氏の…物語の序なるへし」

022 「むつれ」(三二六⑤) 「八オ・割書・増②末より」

思ふとていとしも人にむつれけんしかならひてそ

023 「おさく」(三二六③)

「八ウ→一〇オ・本行・注③末で改行、続いて本文化」

おさく／＼たちをくれ給はすとは日本記響聚治  
幹了と書り又番長ともかけり順は漸と也と云、注房は  
治天下とかくといへり又順か和名には優なりと云、古  
今長哥忠岑か詠おさく／＼しくもおもほえずとあり此  
おさく／＼をいうならずといふ心なりと頭昭古今の注  
にかけり伊勢物語にもまたわかればふみもおさ  
く／＼しからすといへり躬恒か假名の序にもあるし  
おさく／＼しければおかしくすみなしたりとあり或云  
おさく／＼はおの／＼といふ義也又とき／＼といふ心  
なりともいへり此説を思あはするにいつれもみな  
所の謂あり響聚はひきあつまるとよめり幹了はつ  
よ／＼しき義也番長はおとな／＼しう長たる心也さ  
れはむへはか／＼しき人をおさく／＼しといふ宿の  
長者をもむまやのおさといへり治の字はあきらか也  
とよめは治天下といふ説も天下あきらかなりといふ  
心也漸とはやう／＼也優はすくるとよめりされはど  
うの中將文才の道もすくれてあきらかにあそひの方



もいうにてたちをとり給はずといへるにや 又此巻  
にしなされた夜の殿上にござ／＼人も候はずといふ  
はやう／＼人も侍らすといへる坎 又いゑのうちは  
たたらぬ事ござ／＼なかめるまゝにといふござ／＼  
はおの／＼といふ心にや三四位ともといへは也 藤  
式部博士のむすめか事かたりいてゝせうそこふみに  
もかなといふ物ござ／＼かきませすといふは時とも  
かきくせすと也 元良の兵部卿宮女に時々かよひ給  
て後ござ／＼とひ給はずといふもやう／＼かれゆく  
心也又ござなきをもござ／＼しといふ事ありしかれ  
はかやうのことは事にしたかひて心うへき也軌制  
とも書と類字源語鈔に見えたり又さら／＼の心なり  
とも

項一四（一〇オ・割書）※増補注記ナシ

①増補本文《つれ／＼と…心ちするに》

項一五（一〇オ・本行）増補注記024

①別012引「おほとなふら…ゆかしかれは」  
②別012注「文ともなと…ことなるへし」

024 おほとなふら（三六⑦） 「一〇オ・割書・引①中」

おほとなあふらおほとのおふら所々に書かゆるなり  
同

項一六（一〇オ／＼一〇オ・本行）増補注記025／＼026

①別013引「さりぬへきすこし…ゑんすれば」

②別013注「さりぬへきといふ…へきにこそ」

025 「をのかし」 （三六⑩） 「一〇ウ・割書・引①中」

各競日本記春はむめ秋はまかきの菊の花をのかしこそ  
恋しかりけれ貫之各自恣 各寺師人死マカルラシイモノコヒ  
日コトニヤセヌ人にシラレス万葉秋風新拾遺のよもの山より  
をのかし吹にちりぬるもみちかなしも新拾遺私云各  
自身坎我も／＼と云心坎又我友としといふ心

026 「ゑんすれば」(三六⑫) 「二〇ウ・割書・引①末より」

怨也此卷に物ゑんしをするとは嫉妬也同所にえんたち物はちするといふは艶也

①別015引・注

項二〇(一三オ・本行) ※増補注記ナシ

①別016引・注

項一七(一オウ・本行) 増補注記027

①別014引「やむことなく…やすきなるへし」

②別014注「頭中将源氏のかた…よろしきにや」

項二一(一三オ・本行) 増補注記029

①増補本文《おやなど…をいさきこまれる》

027 「二のまち」(二六⑭) 「二ウ・割書・注②中」

二町 御厨子の重となる内第二の品なり

029 「をいさきこまれる」(三七⑩) 「一三オ・本行・増①末で改行して字下げ」

尖ライサキコモレル 籠ライサキ 苗

項一八(一ウ・割書) 増補注記028

①増補本文《かたはしつ…きこえ給つゐてに》

項二二(一三オ・本行) 増補注記030

①増補本文《窓のうちなるほとは》

028 心ココロあてに(三七②) 「二ウ・割書・増①中」

おらはやおらんはつ

030 窓のうちなるほとは(三七⑩) 「一三オ・割書・増①末より」

楊家有女初長成 養在深窓人未識

項一九(一ウ・一三オ・本行) ※増補注記ナシ

楊家有女初長成 養在深窓人未識

項二三（一三オ・本行）増補注記 031

① 増補本文《たゝかたかと…事もあめり》

031 「かたかと」(二七七⑫)

〔一三オ・本行・増①末で改行して字下げ〕

片廉也 片才日本記 一かとある也

項二四（一三ウ〜一四ウ・本行）増補注記 032〜035

① 別017引「かたちおかしく…けしきも」

② 別017注「これはしな…あたるといへる也」

032 「おほとき」(二三七⑩)

〔一三ウ・割書・引①中〕

おほとかと同かときと五音通令序ニオホトカニシテ義穩情 理難通云

又おほめきたる。心とも類字にをほとかとにこりてしや

うをさしたり愚案つねにはをゝとかとよむ坎おほつ

かなし下説又不審

033 「すさび」(二七七⑬)

〔一三ウ・割書・引①中〕

愛する義也

034 「うめきたる」(二三八③) 〔一三ウ・割書・引①末より〕

ウメキ 詠

〔参考03〕項二四 本文②

② これはしなされたための第一也心は人の女のかたちおかしくわかやかなるやうの人なにもしいつるわさあるをいふなりゆへつけてとは自然きようありて也（蘇ハ生） <sup>035</sup>故付也ゆへ／＼しなとも同事也

さやうなる人をそのかたなる人のこと／＼しくいふか見おとりする事あるよしをいへる也此段はすゑつむにあたるなりすゑつむはよろつをくれたる所おはしけれと琴をひき給ひしを太輔の命婦か源氏の君にかたり申たりし事よく似たる事也又此段の始にかたちおかしくわかやかなるほとゝいへる末摘はかたちあしき人もちかうやうなれとこと／＼くる事はなけれと一品なれと詮とする所にたるをは其にあたる

といへる也

【備考①】朱の縦線で消されている「さやうなる」は、  
増補注記<sup>035</sup>の挿入箇所の下下に新たに書かれたと見える。  
項一四八にも類似した例が見える。

035  
「ゆへつけて」(三七⑭)

〔二四オ・本行・注②中に本文化〕

故付也ゆへくしなとも同事也

項二五(一四ウ〜一五ウ・割書) 増補注記<sup>036</sup>〜<sup>038</sup>

①増補本文《はつかしけ…にくき事おほかり》

036  
／しねんにそのけはひこよなかるへし(三八⑧)

〔二四ウ〜一五オ・本行・増①中〕

をのつからしかるへくそのけいき人にことなりといふ心也こよなしとは無此世也又無超也又無越とも書たとへはことのほかといふ心なるへしかきりもなうの心もある坎又閑雅とかけり幽玄の義也閑の字はし

つかにかすかなりとよむかすかは遠なる義也雅の字は正良とよめり正はたゝしき也たゝしきはうるはしき義也されはこよなしとはあまたの義ありことにしたかひて心うへき也

037  
／なお人の(三八⑬)

〔二五オ・本行・増①中〕

四位の殿上人以下諸大夫まで也伊勢物語に紀有常をなを人とかきたれはさほとの人をいふへきにや直人とかきてたゝ人とよむ也たゝ人とは凡俗直人と遊仙窟によめりといへり私云なを／＼しき人といへるは正直に實ある人をいふ心別也

038  
／藤式部のせう(三九①)

〔二五オ〜一五ウ・本行・増①中〕

このそうは少輔也丞にはあらず少輔をも丞をもかなにそうと書事常のことし人によりて心うへし此二人は源氏君と頭中将と物語し給所へまいりあひたるなり

項二六（一五ウ〜一六オ・本行）※増補注記ナシ

①別018引・注

項二七（一六オ〜一六ウ・本行）増補注記039

①別019引「又もとはやむこと…品にそをくへき」

②別019注「これは末つむ…馬の頭の詞なり」

039 「中の品にそをくへき」(三一九⑦)

〔一六ウ・本行・注②中に本文化〕

（朱中のしなにてをくへきは朱）  
納言已下直人已上也空假中の三諦の中にも以テ中

道ヲ一為ニ究竟ト一これすなはち一乘實相の理なり

項二八（一六ウ〜一七オ・本行）増補注記040

①別020引「又すりやうといひて…ころほひなり」

②別020注「此品は軒はの荻…おほき由也」

040 「けしうはあらぬ」(三一九⑧)

〔一六ウ・割書・引①末より〕

けしうはあらぬとはあしうもあらぬとほむることは

也人のみめかたちをいふ所にては不<sup>フ</sup>下<sup>ケ</sup>習<sup>シ</sup>と濁病な

とをいふ所にては不<sup>フ</sup>性<sup>ク</sup>澄<sup>ユ</sup>也或説けしからぬなどい

ふ詞にて心うへし

項二九（一七オ〜一七ウ・本行）増補注記041

①別021引「なま〜…あまたあるへし」

041 「なま〜のかむたちめよりも非参議の。四位とも

の世のおほえくちおしからず」(三一九⑨)〔一七オ〜一七

ウ・本行・引①末で改行、字下げして本文化〕

なま〜とは物のなまなる心也はしめて公卿などに

なりたる家をいふなりなまめきたるとあれと不用私

云なましゐの上達部といふ也未熟心也又云なみ〜

也まとみと五音通する也是は心叶なり愚案生の義に

ても侍へきにやしゐかもともなま孫王めくなどい

へる心もかよひてや侍らん参議とは天下のまつりこ

とをましはりはかるつかさ也八座より以上大納言ま

てを参議といふ年代録ニ云天武天王の御宇朱雀元年に始て置<sup>ツク</sup>ニ参議<sup>ヲ</sup>一又文武天皇の御代大寶二年大伴安磨<sup>ヤスモ</sup>始て任<sup>ニ</sup>参議<sup>ニ</sup>一又元正天皇御時養老五年九月始置参議<sup>ヲ</sup>一と云、非参議とはいまた納言宰相などにならぬ二位三位四位などの事を非参議といふ也

【備考②】伊地知本には、落丁により、別022注、別023引・

注、別024引・注がなく、次丁の一八オは別024引に後接する増補本文（項三〇）から続いている。

項三〇（一八オ・割書）※増補注記ナシ

① 増補本文《なにかしか…うちをき侍ぬ》

項三一（一八オ・本行）※増補注記ナシ

- ① 別025引「さて世にありと…おほえめ」
- ② 増補本文《いかて…心とまるわさなる》
- ③ 別025注「夕かほの上にあたり」

項三二（一八オ〜一八ウ・本行）増補注記042

① 別026引「ちゝのとし…おかしからさらむ」

② 別026注「是は種性…おもてにも見えたり」

042 「せうと」（四〇〇⑨） 「一八オ・割書・引①中」

女のおとゝい也

項三三（一八ウ・割書）※増補注記ナシ

① 増補本文《すくれて…物もいはず》

項三四（一八ウ〜一九オ・本行）※増補注記ナシ

① 別027引・注

項三五（一九オ・割書）※増補注記ナシ

① 増補本文《しろき御そ…きなしたまひて》

項三六（一九オ・本行）※増補注記ナシ

① 別028引・注

項三七（一九オ・割書）※増補注記ナシ

① 増補本文《そひふし：いとめてたく》

項三八（一九オ・本行）※増補注記ナシ

① 別029引・注

項三九（一九ウ・割書）※増補注記ナシ

① 増補本文《此御ために：かしこしとでも》

項四〇（一九ウ・本行）増補注記043

① 増補本文《ひとりふたり：わさならねは》

043  
ひとりふたり世の中をまつりこちしる。わさならね  
は（四一⑧）

〔一九ウ・本行・増①末で改行して字下げ〕

天下の政をは大政官にてこれをとっておこなふ日に万  
機の務なるによりて三公九卿を置てつかさとしむ  
る也まつりこちしるはまつりこちしる心也

項四一（一九ウ・本行）増補注記044

① 増補本文《かみはしもにたすけられ》

044  
かみはしもにたすけられ とは（四一⑨）

〔一九ウ・本行・増①末で改行して字下げ〕

忠臣君のまつりことのみたるゝをいさめ申万民あふ  
きたてまつる事をたすけられといへる也

項四二（二〇オ・本行）増補注記045

① 増補本文《しもはかみになひきて》

045  
しもはかみになひきてとは（四一⑨）

〔二〇オ・本行・増①末で改行して字下げ〕

呉王好ヲクシカハニケシ客カク一ハク百セ姓セイ多マシニシ癩シヤウ瘡ソウ一シ楚ソ王好ヲクシカハニ  
細サイ腰ヨウラ一ホクシ宮中ニ多シニカ餓死カシスルモノ一シ上之所カ好コ下必カス  
從シタカフ

大宗の給はく上おさまりて下みたるゝ事はいまたき  
かすと云

上<sup>ミ</sup>含<sup>テ</sup>淳<sup>ニ</sup>徳<sup>ラ</sup>一以<sup>ト</sup>逢<sup>フ</sup>其<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>一々<sup>モ</sup>懷<sup>ク</sup>忠<sup>ニ</sup>信<sup>ヲ</sup>一以<sup>テ</sup>事<sup>フ</sup>ツル<sup>ニ</sup>  
其<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>一史記

047 「物まめやか」(四二③) (二〇ウ・割書・引①中)

正首

項四三 (二〇オ・割書) ※増補注記ナシ

① 増補本文《事ひろきに…かた／＼おほかる》

項四七 (二一オ・割書) ※増補注記ナシ

① 増補本文《されと何か世…事もなしや》

項四四 (二〇オ／＼二〇ウ・本行) ※増補注記ナシ

① 別030引・注

項四八 (二一オ／＼二一ウ・本行) ※増補注記ナシ

① 別032引・注

項四五 (二〇ウ・割書) 増補注記 046

① 増補本文《なのためにさても…かたきなるへし》

項四九 (二一ウ／＼二二オ・本行) 増補注記 048／049

① 別033引「かたちきたなけ…なんとすへし」

046 「よるく」(四一⑭) (二〇ウ・行間・増①中)

縁ヨルへ日本記

048 「ことえり」(四二⑦) (二一ウ・割書・引①中)

言コトエリ 言撰

項四六 (二〇ウ／＼二一オ・本行) 増補注記 047

① 別031引「かならずしも…はからるゝなり」

② 別031注「此詞男女の上…大切の詞也」

049 「すへなく」(四二⑧) (二一ウ・割書・引①中)

焉コト標無 無便 無為



項五〇 〈二二オ〜二四ウ・本行〉 増補注記 050〜054

① 別 034 引「ことか中になのめ…くちおしからぬ」

② 別 034 注「ことか中にとは…とかけるなり」

054 「あはつかに」(四三⑦)

〔二三オ・割書↓行間・引①末より、改行して注②中の行間へ〕

あはつかにとは淡付也淡々敷也頓日本記 迅永古語拾遺 あは

つけきもおなしあはめにくむといへるも淡悪也あは

つかにとは周章ともかけり史記に遽トかけり此字を

はいそくともはやしともよめはおもひもいれすあは

たゝしといふ心也かはやすめ字也又あはくしとい

ふ事あり此は水のあはのやうに正たいなき事也

050 「おかしき」(四二⑫) 〔二二ウ・行間・引①中〕

ほめたる詞にも又比興なる事にもつかふと見えたり  
所にしたかふへし

051 「まめくしき」(四二⑬) 〔二二ウ・割書・引①中〕

真と敷

項五一 〈二四ウ〜二五オ・本行〉 増補注記 055〜057

① 別 035 引「たゝひたふる…心ちすへし」

② 別 035 注「是は天性…是にあたる也」

052 「ひさうなき」(四二⑭)

〔二二ウ・割書・引①中〕

無美相或無貧相澄

055 「ひたふる」(四三⑦) 〔二四ウ・行間・引①中〕

又ひたうるに同

053 家とうし(四二⑭) 〔二二ウ・割書・引①中〕

遊仙窟に主人母シユシノハ、とかきていゑとうしとよめり常には

家童子とかけり

056 「ひたふる」(四三⑦) 〔二四ウ・割書・引①中〕

甚振偏 一切 一向 行悟云 永 頓絶日本記 永迅日本記

頓同ひたみちにといへるもひとへにといへる也ひた  
すらにといふもおなし心坎毛詩には太とかきてひた  
すらとよめり日本記には永也

057 「こめき」(四三⑦) 〔二四ウ・割書・引①中〕

古めきこめかしくくはしき也私云こまやかなる心  
こゝしき同心也乙女にいとこめかしうしめやかにう  
つくし古フルメカシキ心もあるへし

項五二 (二五オ・本行) 増補注記 058

- ① 別 036 引 「けにさしむき…ゆるしつへし」
- ② 増補本文 《をたちはなれて…くるしからん》
- ③ 別 036 注 「心はいとおしき…心は前に侍りき」

058 「らうたぎ」(四三⑨) 〔二五オ・割書・増①中〕

勞イタル良 私云ほげやかにやはらきむさうけのある  
をらうたけなりと云也

項五三 (二五オウ・二五ウ・本行) 増補注記 059

- ① 別 037 引 「つねはすこし…ありかしなと」
- ② 別 037 注 「そはくしく…あたれるなり」

059 「そはくし」(四三⑬) 〔二五オ・割書・引①中〕

文選第一觚稜とかけり うちそむきくねくしき心  
也

項五四 (二五ウ・割書) ※増補注記ナシ

- ① 増補本文 《くまなき物…うちなげく》

項五五 (二五ウウ・二六オ・本行) 増補注記 060 〵 061

- ① 別 038 引 「いまはたゝ…もとめくはへし」
- ② 別 038 注 「あまりのゆへ…すへきの儀也」

060 いまはたゝしなにもよらしかたちをさはさらにもいは  
し (四三⑭) 〔二六オ・割書・引①中〕

人はたゝ心むけを本とすへししなもかたちもいらぬ

と云心也三界唯一心万法唯識の心也。源氏一部の肝心  
こゝにあり

061 「ねちけかましき」(四四①) 「二六オ・行間・引①中」  
ならさかやこのて

項五六 (二六オ) (二六ウ・本行) ※増補注記ナシ  
①別039引・注

項五七 (二六ウ) (二七オ・本行) 増補注記062) 063

- ①別040引「えんに物はち…かくれぬかし」
- ②別040注「是は伊勢物語に…よくにたるへし」

062 えんに (四四⑥) 「二六ウ・割書・引①中」

艶也えんなるあしたなどやさしきかたは皆同

063 物はちしてうらみいふへき事をも見しらぬさまにし  
のひてうへはつれなくみさほ。(四四⑥)

「二六ウ・割書・引①末より、改行しても引①末の高さから」  
。操ミサホ 私云此心不叶坎心はせを心操と注するは叶へ  
りみさほつくるは心にくけなる姿をつくる也心別也  
古哥云夕されはみさほにもゆる蚩かな聲たてぬへき  
このよと思に是はなをさりの心なり松柏の操はずみ  
てよむ

項五八 (二七オ) (二七ウ・本行) ※増補注記ナシ  
①別041引・注

項五九 (二七ウ・割書) ※増補注記ナシ

- ①増補本文《心さし…あちきなき事也》

項六〇 (二七ウ) (二八オ・本行) ※増補注記ナシ

- ①別042引・注

項六一 (二八オ・割書) 増補注記064

- ①増補本文《いてあなかなし…人ふるこたち》

064／ふるこたち (四五④)

(二八才・割書・増①末で改行して字下げ)

女房の惣称 後達 御達 子達 女は夫の後に居する也後漢書鄭玄注に云礼記云在夫<sup>ノ</sup>後<sup>云</sup>故に后と云も後儀也仍女を後達と云或人みやつかへ人をいふ也後達とかけり南殿の北後涼殿に女御はおはしますされは女は男のうしろ北向<sup>キ</sup>にゐるへき也北政所北方下さまには女をは北おもてなといふなり内侍も節会さるへきおりは内の御後に候也御達はかしつく儀也母御姉御と俗にいふかことし濁てよむたとへは女御大御など申も女房のよき名也大御は皇太后宮などの御事にや子達は女の實名をは何子と云仍子達と澄てよむみふたにもなに子なとつけは子達にてこそあれと申されと後の儀は猶かなへる欵

項六二 (二八才・割書) 増補注記 065

① 増補本文《なと君の御心は…見給ひつへし》

065 「あへなく」 (四五⑤)

無敢

(二八才・割書・増①中)

項六三 (二八才ノ二八ウ・本行) ※増補注記ナシ

① 別043引・注

項六四 (二八ウノ二九才・本行) ※増補注記ナシ

① 増補本文《たえぬすくせ浅からて》

② 別044引・注

項六五 (二九才・割書) ※増補注記ナシ

① 増補本文《あしくもよくも…あはれならめ》

項六六 (二九才ノ二九ウ・本行) ※増補注記ナシ

① 別045引・注

項六七 (二九ウノ三〇才・本行) ※増補注記ナシ

① 別046引・注

項六八 〈三〇オウ三〇ウ・本行〉 ※増補注記ナシ

① 別047引 「すへてよるつ…まさりぬへし」

② 増補本文 《おほくは…おさまりもすへし》

③ 別047注 「すへてとは…人とはいへるなるへし」

項六九 〈三〇ウ三〇ウ・本行〉 ※増補注記ナシ

① 別048引・注

項七〇 〈三一オ・割書〉 増補注記066

① 増補本文 《つなかぬ舟のうきたるためしも》

066 つなかぬ舟のうきたるためしも (四六⑤)

〔三一オ・割書・増①末より〕

文選<sup>ニ</sup> 泛乎<sup>ハレコ</sup>トシテ 若<sup>シ</sup>ニ不<sup>ル</sup>レ繋之舟<sup>ノ</sup> 一 朗詠集<sup>ニ</sup> 観身

岸額離根草 論命江頭不繋舟

項七一 〈三一オ・割書〉 増補注記067

① 増補本文 《けにあやなし…中將うなつく》

067<sup>宋</sup> うなつく (四六⑥) 〔三一オ・本行・増①末より〕

ウナツク 顔許とも又領許とも

項七二 〈三一オ・本行〉 ※増補注記ナシ

① 別049引・注

項七三 〈三一オウ三一ウ・本行〉 ※増補注記ナシ

① 別050引・注

項七四 〈三一ウ三二オ・割書〉 増補注記068

① 増補本文 《ともかくも…ひゝらきみたり》

068<sup>宋</sup> ひゝらきみたり (四六⑩)

〔三一オ・割書・増①末で改行して字下げ〕

軽粧<sup>ヒビヒチチタリ</sup> 鴨の羽たゝきしてほこりたるけしきをい

ふ又ひえ鳥のうそをかまふる時のけしき也ひいり羽

をつかふといふたとへは軽々なるすかたなり又われ

はかほなるともいふへき坎定本にはひゝらきみたり

とあり或本云ひらゝみたり羽たゝきて鳥の囀みたる姿也又云ひゝちみたりとはくちひるをうこかす心也ひゝらくとかける本も同事也ひゝらくとは囀といふ字也誰謂水無心濃艶臨兮波変色謂花不語輕濼激兮影(心ハ情ニ要スキ)

項七五 〈三二オ・割書〉※増補注記ナシ

① 増補本文《中将は此：あへしらひる給へり》

項七六 〈三二オ〜三三オ・本行〉増補注記 069〜071

① 別 051 引 「よろつの事：おかしきもあり」

② 別 051 注 「馬のかみか詞：たとへいふ也」

069 よろつの事によそへておほせ (四六⑭)

〔三二オ〜三三ウ・割書・引①中에서도二行目以降は字下げ〕

雨夜の物語はしめは女のしな心むけのよしあしきを物にもたとへすありのまゝに書たり此たんよりは又木のみちゑ所手かき此三の藝にたとへて人のまこと

あり偽のある事をのふ此下のたんには其初の事すき／＼しくともきこえむとておの／＼昔ありし事もをたかひにかたりいたす如此三段にかきわけたる詞のつゝきひとへに法花経の三周説法のすかたをかたとれり三周とは法説一周喩説一周因縁説一周也法説一周は方便品也此品は直に妙法の道理をときて上根の聲聞舍利弗に對してさとらせしむ是を法説といふ次に喩説一周は譬喩品也此品の初には法説の述成授記有これまでも舍利弗に對しての説法也其次段に三車一門のたとへをはりて三乗つゝみに一乘に歸するおもむきをのへて中根の聲聞須菩提迦施迦葉目連にさとらしむ信解品菓草喩品までも喩説の述成授記也次因縁説一周は化城喩品也此品は過去久遠劫大通智勝佛と云如来の法花を説給ふをきゝし人の中比退屈の思をなして小乗を修行せしかいま又釋尊の説法を聞て回心向大の聲聞となれる因縁をときて下根の千二百人に次第に授記し給ふ彼法理を直にとくとたとへをかりて云と過にしかたの因縁をとくと彼三周

のすかたいまの物語の作りさまにあひにたるなり世俗文字の業狂言綺語をあらためて讚佛乘の因轉法輪の縁とせる心也下の詞に中将いみしう興してのり師の世のことはりととききかせん所の心ちすといへる此ことはりを思て書るなるへし

070 「りんし」（四六⑭） 「二三ウ・行間・引①中」

臨時也

071 （生うはへにイ本墨） そはつきされはみたるもけにかうもしつへかりけりと時につけつゝ様をかへていまめかしきにめうつりておかしきもあり（四七①）

「二三ウ」三三オ・割書・引①末より、二行目以降は字下げ）  
或人にそはつきうはへ此両様不審にて尋侍しかはそはつきとはかと／＼しくあされたる事也と云。又或説にはたゝすゝりなにくれのはこやうの物のそはなめりとて分明ならず又或人にたつね申て侍しかはそはつきに點をあはれて侍りき 人の心をもうはへのな

さけ手を書たるにもうはへの筆なとかきたれはしき／＼ならぬ物をうはへにといへる坎されとそはつきとかきたるはうるはしからぬ物をそは見たるなどいはむとてそはつきされはめるとかけり此儀猶かなへる坎されはうはへにそはつ（キ兼八生）きあやまるへき文字と見えたり

【備考③】末尾の消されている「キ」は「幾」を字母とするが、行間の「き」の字母は「支」。

項七七 〈三三オ〉三三ウ・本行〉※増補注記ナシ

①別引・注

項七八 〈三三ウ・本行〉増補注記072

①別引「又彖所に上手…えらはれて」  
②別注「墨書とは取分…いへるなり」

072 又彖所（四七④） 「二三ウ・割書・引①中」

西宮記云畫所在式乾門内東腋御書所南有別當（人五位藏頭）

項七九 〈三三ウ・割書〉 ※増補注記ナシ

① 増補本文 《つきく》に…さてありぬへし》

項八〇 〈三三ウく三四オ・本行〉 増補注記 073く 076

① 別 054 引 「よのつねの山…をきてなとをなむ」

② 別 054 注 「前にいへる繪…をたとへ云也」

073 （系） / すくよかなる （ならぬイ） (四七⑩) 「三三ウ・割書・引①中」

健 世クイ すくくしといへるも同事也又すくよからぬ

同詞也

074 山のけしきこふかく世はなれてたゝみなし (四七⑩)

〔三四オ・割書・引①中에서도二行目以降は字下げ〕

すくよかなる山とは深山の景氣也すくよかならぬと  
かける本とも侍れと上 （兼イ） 仲によのつねの山のたゝすま  
ひといへるこそすくよかならぬと見えたればこゝは  
ふかき山なるへき坂又たゝみなしとは山をたゝむ心  
也なにをも多にもかきなし作なすをはたゝむといへ

り大方繪には山水地形などかゆるしき大事也唐の時

に王維といふ詩仙あり文才のみにあらず繪をおもし

ろくかきけり其は咫尺 （センチ） の間に千里の景氣をかきける

これをよき畫士とは申也と （云）

075 （系） / 心しらひ (四七⑫) 「三四オ・割書・引①中」

心つかひ也 又心知也 （クシネツ） 煖熱とかけり （コシラヒ）

076 （系） / をきて (四七⑫) 「三四オ・割書・引①中」

掄の字也

項八一 〈三四オ・割書〉 ※増補注記ナシ

① 増補本文 《上手はいと…所おほかめる》

項八二 〈三四オく三五オ・本行〉 増補注記 077

① 別 055 引 「てをかきたる…たまへて侍る」

② 別 055 注 「此三のたとへ…不終也といへり」



077／そこはかとなく（四七⑭） 「三四ウ・割書・引①中」

無其計又無其墓

項八三 〈三五オ・本行↓割書〉 増補注記 078

① 増補本文《そのはしめの…なむありける》

078 「しむして」（四八⑤） 「三五オ・割書・増①中」

信してなり

〈参考04〉 項八三 本文①

① そののはしめの事すきくしくとも申侍らむとてちかくみ  
よれば君もめさまし給中侍いみしくしむして 078なむしてつらつ

えをつきてむかひぬ給へり法の師の世のことはり備せと備きかせん所の心なむするもかなむつはお  
かしけれとなむかなむるつゝてにはをのくなむむつこともえしなむのひとくなむめすなむありける

【備考④】 右のように伊地知本に近い形で（改行箇所、

本行／割書の区別等を守って）本項の書式体裁を再現

してみると、「つらつえ」の「え」の部分から割書の

体裁になることが確認できる。冒頭の「そのはしめの

事」に付く右肩の書入れを以て、書写者はこの体裁の  
変化を次のように記す。

コ、ヨリコマカニカクヘキヲ忘却シテ大ニカクツラツ

エノエ文字ヲモテシルヘシ

なお、伊地知本全体を通じてみると、増補本文は必ず  
しも「コマカニ」（割書で）書くわけではないが（本  
行化の例に項九、項一二、項二二〜項二三、項四〇〜  
項四二）、項八三以降はこの書き分けが確かに守られ  
ている。（一方で増補本文が本来の『帯木別注』の引  
用本文に取り入れられている場合は例外なく本行化す  
る。）

項八四 〈三五オ〜三五ウ・本行〉 増補注記 079〜080

① 別056引 「はやうまた…まきれ侍しを」

② 別056注 「是は馬頭むかし…さまをいへるなり」

079／まほ（四八⑨） 「三五オ〜三五ウ・割書・引①中」

真直万真帆船に片帆真帆とて随風テ引也正しきを真帆

といふ心可知

080 (朱) さうくしく (四八⑩) 〔三五ウ・割書・引①中〕

寂寞 ササウサシキ也 閑 同

項八五 〔三五ウ・割書〕 増補注記 081 〔三五ウ・割書〕 082

① 増補本文 《物えんしを：やうになむ侍し》

081 (朱) 「物えんし」 (四八⑪) 〔三五ウ・行間・増①中〕

怨也 ウラミ

082 (朱) 心つきなく (四八⑫) 〔三五ウ・割書・増①中〕

無心付又無心月

項八六 〔三五ウ・割書〕 本行 ※増補注記ナシ

① 別 057 引・注

項八七 〔三六オ・割書〕 増補注記 083 〔三六ウ・割書〕 089

① 増補本文 《とにかくに：なみくにもなり》

083 (朱) すくめる方の人と思ふ給へしかと (四九④) 〔三六オ・割書・増①中〕

強と書てすくむとよめり下になよひゆきといへはす  
くめる儀かなへり

084 (朱) わりなく (四九⑤) 〔三六オ・割書・増①中〕

無別 日本記 無破 同

085 (朱) うとき人に見えはおもてふせにや (四九⑤) 〔三六オ・割書・増①中〕

外人不見々可被笑 文集

086 (朱) みさほに (四九⑥) 〔三六オ・割書・増①中〕

たしくうるはしと云詞也

087 「よろしくもなりさかなさも」 (四九⑨)

不良也

〔三六オ・割書・増①中〕

毀也

又言敏イヒツシ  
イフツク

〔三六ウ・割書・増①末より〕

088／おそましくは（生）（四九⑫）

〔三六オ・割書・増①中〕

項九〇 〈三六ウ↪三七オ・本行〉 ※増補注記ナシ

形遠文選又形起 をすまし上同ツトス私云うとくおそろしき

①別059引「すこしうち：思なされて」

心なり

②増補本文《心やましく…ねたけにいふに》

089／人なみ／にもなり（生）（五〇①）

〔三六ウ・本行・増①末より〕

項九一 〈三七オ↪三七ウ・本行〉 ※増補注記ナシ

左傳に 若而人シヤクシシム  
ヒトナミクとかけり

①別060引「はらたゝしく…しくかこちて」

項八八 〈三六ウ・本行〉 ※増補注記ナシ

①別058引・注

項九二 〈三七ウ・割書〉 ※増補注記ナシ

①増補本文《かゝるきす…かゝめてまかてぬ》

項八九 〈三六ウ・割書〉 増補注記090

①増補本文《かしく…たけくいひそし侍に》

項九三 〈三七ウ↪三八オ・本行〉 増補注記091↪092

①別060注（ロ）「手をおりて…うきふし」

090／いひそし侍に（生）（五〇③）

②別061引「えうら見しなといひ侍れは」

③ 増補本文《さすかにうちなげきて》

④ 別061注（イ）「うきふしを…わかるへきおり」

⑤ 別061注（ロ）「はらたゝ敷…おもはぬなり」

【備考⑤】伊地知本では、本来の別060注は一部が項

九一に収まるが、その末尾部分に当たるとる所引和歌「手

をおりて」は独立して、本項に組み入れられている（『源

氏物語』の本文上でも後続する別061引部分の直前に）。

また、本来の別061注は所引和歌「うきふしを」ではじ

まるが、その和歌も伊地知本で（注記部分から切り離

されて）本項の引用本文に組み入れられる（別061引に

続く増補本文の末尾で改行してから）。

下の詞に見ゆ

項九四 〈三八オ・割書〉※増補注記ナシ

① 増補本文《なといひしろい…まかりありくに》

項九五 〈三八オ〜三八ウ・本行〉増補注記 093〜094

① 別062引「りんしの祭の調楽…つゝまかてゝ」

② 別062注「臨時の祭…行けるなるへし」

093 りんしの祭の調楽に（五一③）

〔三八オ・割書・引①中でも二行目以降は字下げ〕

臨時祭調楽は十一月中午日也賀茂にてあるへき楽を

まつ内裏にてとゝのへならさるゝ也昔は三箇日當時

は二ケ日なりといへり私云賀茂臨時祭宇多御門御宇

寛平九年ヨリ始ル北祭といふ也北陣（北野也）に握屋（アケヤ）をうちて

基盤をすへて有儀式饗膳をおこなひて勸盃（ウヂノヘイ）あり穀倉

院の別當の沙汰ときこゆ

091 手をおりてあひ見し事をかそかれはこれひとつやは  
君かうきふし（五〇⑬）

〔三七ウ・行間・注①中〕

上句伊勢物語の哥をとれり

092 「馬頭か心に誠にかはらむとはおもはぬなり」（宗

祇注記本文）

〔三八オ・割書・注⑤末より〕

094／まかりあかるゝ所にて（五一④）

〔三八オ・割書・引①中〕

散也預まかりあかるゝと云別也わとかと同音

項九八（三九オ・本行）増補注記 097

①別 064 引「なへたるきぬ…うちかけて」

②別 064 注「あつこえたる…にかけたるへし」

項九六（三八ウ・割書）増補注記 095

①増補本文《なま入わろく…と思ひ給へしに》

097 「なへたるきぬとも」（五一⑧）

〔三九オ・割書・引①末より〕

095 なま入わろくつめくはると（五一⑦）

〔三八ウ・割書・増①中〕

はつかしき心也

私云衣ノナへハミタルトハ損シテフクタミナヘタル心

項九九（三九オ・割書）※増補注記ナシ

①増補本文《ひきあくへき…心おこりするに》

項九七（三九オ・本行）増補注記 096

①別 063 引「火ほのかにかへにそむけて」

②別 063 注「女の家のさま也…へきさまなり」

項一〇〇（三九オ・本行）増補注記 098

①別 065 引「さうしみはなし」

②別 065 注「本人の事也 右馬頭か妻也」

096 火ほのかにかへにそむけて（五一⑧）

〔三九オ・割書・引①末より〕

耿々残燈背壁影 蕭々暗雨打窓聲 白氏文集

098 さうしみはなし（五一⑩）〔三九オ・割書・引①末より〕

正身サウシミ正自身同正員也 所につけてそこの主人を

いふ

項一〇一〈三九才〜三九ウ・割書〉※増補注記ナシ

①増補本文《さるへき女房…もせていと》

項一〇二〈三九ウ・本行〉増補注記 099

①別 066 引「ひたやくもりに」

②別 066 注「何ゆへとも…しをきけるなるへし」

099 ひたやくもりに (五一)⑫〔三九ウ・割書・引①末より〕

アカウ平字文と云書に在之 ヒタヤコモリ  
阿衡 直隠也 うきによりひたやくもり

と思へとも近江の海はうち出て見よ

項一〇三〈三九ウ・割書〉※増補注記ナシ

①増補本文《なさけなかりし…そむきもせず》

項一〇四〈三九ウ・本行〉※増補注記ナシ

①別 067 引・注

項一〇五〈三九ウ〜四〇オ・本行〉※増補注記ナシ

①別 068 引・注

項一〇六〈四〇オ・割書〉※増補注記ナシ

①増補本文《いらへつゝ…ともいはず》

項一〇七〈四〇オ〜四〇ウ・本行〉増補注記 100〜102

①別 069 引「いたくつなひき…なむおほえ侍し」

②別 069 注「いたくつな…たはふれたる心也」

〈参考 05〉項一〇七 本文②

②いたくつなひきてとは女は馬頭きたらはきこそと  
うちなひきぬるを猶女をこらさむと思ひてわさとの  
けひきてよりつかぬ儀也 100へむまのつなひきするに  
よそへたる也物を物にかけて引もはなれぬ心也引よ  
せはたゝにはよらて春駒の 101へつなひきするそな  
はたゆときくなとふるくもいへりたつと思ふはひか  
事にや候らむ此へ哥にて書る也たはふれにくゝとは

ありぬやと心見かてらあひ見ねはたはふれにくき  
102  
〈まてそ恋しき〉の哥の心也あはんとはおもへともと  
かく女の心をこらさむとしたるはたはふれたる心也

100 「いたくつなひきて」(五二⑦)

〔四〇オ〜四〇ウ・本行・注②中に本文化〕

むまのつなひきするによそへたる也物を物にかけて  
引もはなれぬ心也引よせは

101 「いたくつなひきて」(五二⑦)

〔四〇ウ・本行・注②中に本文化〕

つなひきするそなはたゆときくなどふるくもいへり  
たつと思ふはひか事にや候らむ此

102 「たはふれにく」(五二⑧)

〔四〇ウ・本行・注②中に本文化〕

まてそ恋しき

項一〇八(四〇ウ・割書)※増補注記ナシ

①増補本文《ひとへにうち…かひなからず》

項一〇九(四一オ・本行)※増補注記ナシ

①別引・注

項一一〇(四一オ〜四一ウ・本行)増補注記 103

①別引「中将その七夕…にそあへまし」

②別注「たちぬふ…とりていへるなり」

〈参考06〉項一一〇 本文②

②たちぬふかたは似すともななき契りにあやからせ  
たきよしの也 103 〈後撰にあふことは七夕つめにおな  
しくて〉たちぬふわさはあへすそ有けると云哥をと  
りていへるなり

103 「七夕のたちぬふかた」(五二⑫)

〔四一ウ・本行・注②中に本文化〕

後撰にあふことは七夕つめにおなしくて

〈参考07〉項一一四 本文②

項一一一〈四一ウ・四二オ・本行〉※増補注記ナシ

②うへ人誰ともなし木枯の女にかよへる人也大納言  
誰ともなし<sup>104</sup>〈馬頭か父坎只大納言と云まで也〉

①増補本文《けに》

②別072引「その立田姫：消ぬるわさ也」

104 「大納言」(五三⑩)

③増補本文《さあるにより…いひはやし給》

〔四二ウ・本行・注②中に本文化〕

④別072注「又しく物あらし…ほめ云る也」

馬頭か父坎只大納言と云まで也

項一一二〈四二オ・四二ウ・本行〉※増補注記ナシ

項一一五〈四三オ・割書〉※増補注記ナシ

①別073引・注

①増補本文《此人のいふ…心くるしきとて》

項一一三〈四二ウ・割書〉※増補注記ナシ

項一一六〈四三オ・本行〉増補注記<sup>105</sup>

①増補本文《この人うせて…人そありけらし》

①別075引「この女の家…さすかにて」

項一一四〈四二ウ・本行〉増補注記<sup>104</sup>

105<sup>(系)</sup>池の水かけ見えて月たにやとる栖をすきんもさす  
かにて(五三⑫) 〔四三オ・割書・引①末より〕

①別074引「神無月の比…とまらむとするに」

②別074注「うへ人誰…大納言誰ともなし」

拾遺集 池に月の見えけるをよめる 伊勢



雲井にてあひかたらはぬ月たにもわか宿すきて行時はなし

項一七（四三才・割書）※増補注記ナシ

① 増補本文《おり侍ぬかし…月を見る》

項一八（四三才〴〵四三ウ・本行）増補注記 106

① 別 076 引「菊いとおもしろく…つゝしりうたふ」

② 増補本文《ほとに》

③ 別 076 注「かけもよし…万里少路にありと云」

106 「影もよしなど」（五四③）〔四三才・割書・引①中〕

飛鳥井にやとりはすへし影もよし身も日もさむしみまくさもよし

項一九（四三ウ〴〵四四才・本行）増補注記 107

① 別 077 引「よくなる和琴…かきならして」

② 別 077 注「律は秋をつかさ…秋に属する物也」

107 よくなる和琴を（五四③）〔四三ウ・割書・引①中〕  
菅ををにかけそめし物なれはすかかくと云也

項二〇（四四才・割書）増補注記 108

① 増補本文《すのうち…もとにあゆみきて》

108 すのうち（五四⑤）〔四四才・割書・増①中〕

簾中也

項二一（四四才〴〵四四ウ・本行）増補注記 109〴〵110

① 別 078 引「庭の紅葉こそ…ねたます」

② 別 078 注（前半）「と云詞大かた…きこえ侍にや」

109 庭の紅葉こそふみわけたる跡もなけれなど（五四⑦）

〔四四才・割書・引①中〕

古今 秋はきぬ紅葉は宿にふりしきぬ

110 「ねたます」（五四⑦）〔四四ウ・割書・注②末より〕

／＼<sup>卷</sup>妬也  
／＼<sup>卷</sup>勵也

【備考⑥】別078引は「ねたます」以降、「菊をおりて」まで続いて、別078注は所引和歌「ことのねも」で始まる。伊地知本ではその両方が本項から欠落して、代わりに項一二二（新設）の増補本文で、その部分が補われている。

項一二二（四四ウ・割書）増補注記111

①増補本文《菊をおりて…ひきやとめける》

111 「きく」<sup>月イ</sup>（五四⑨）

〔四四ウ・割書・増①末で改行して字下げ〕

此両様親行に尋侍しかは神無月のころにて月あかきよし見えたり又ねたます菊をおりてよみたる哥なれば月も菊も共にいはれ侍れとも残菊題にて侍うへことのおねもきくもとそへたるは猶縁なるさまにやおほくは菊と侍りねたますとははけます也えならぬとは吉不並たくひなりほむる詞也えもいはすといふ心也

或艶なりとも愚案此時はならぬといへる心えかたき様なれともすさめぬといふにも両儀あるにやこころえ侍るへき又文字には殊勝とかきたり其心はこゝにてはいはれず河海にはえならぬはたゝならぬと云心也

項一二三（四四ウ・割書）増補注記112

①増補本文《わろかめりなと…つくろひて》

112<sup>系</sup>／＼あされかくれは（五四⑩）〔四四ウ・割書・増①中〕

されかゝる也私云あ文字はさゝけ物也たゝされたると同事也あされかくれはとあるも同事也さりながらよしはむとも心うへくや又云たはふれたる詞也俊成口傳に誹諧哥をはされ哥といへりたはふるゝかことし

項一二四（四五オ・本行）※増補注記ナシ

①別078注（後半イ）「木枯に吹…はそなき」

②別078注（後半口）「前の哥は…入ていへるなり」

【備考⑦】伊地知本では項二二の別078注の、所引和

歌「木枯に」で始まる後半部分を独立させている。その和歌部分を独立した本項の引用本文として扱い、それに続いてた注記部分を（字下げを施して）その注記本文としている。

項二二五（四五才・割書）※増補注記ナシ

①増補本文《とまめきかはすに》

項二二六（四五才〴〵五ウ・本行）増補注記113

①別079引「にくくなるを…なむし侍りし」

②別079注「にくくなるとは此…かとある儀也」

113（注） さうのことはんしきてうにしらへていまめかし  
くかいひきたる爪をとかとなきにはあらねとまはゆき  
心ちなむし侍りし（五四⑬）

〔四五才〴〵五ウ・割書・引①末より〕

侍従三位公世卿云盤涉調のしらへといふはゆしき箏

の秘事もことちのたてやうもなへてならず琵琶の清調のしらへなどのやうに心のまゝにてにまかせてよろつの樂を引事ふしきにおもしろしと云。又伊行云此しらへは仙より来れりとかけりかゝる秘藏の調子なれともかのうへ人きあひて手なのこひ給そなどあされかくるにしのひあへす引けるを左馬頭きゝてかとなきにはあらねとまはゆき心ちなむし侍りしとはいひけるにや

項二二七（四五ウ・割書）※増補注記ナシ

①増補本文《たゝ時／＼…おもひ給へらるへき》

項二二八（四六才〴〵四六ウ・本行）増補注記114〜115

①別080引「御心のまゝに…しり侍りなむ」

②別080注「萩の露玉さゝ…へきの心なり」

114 「あへかなる」（五五⑧）

〔四六才〴〵四六ウ・割書・引①中〕

八雲御抄にうつくしくひはつなる心也とあり

115 「七とせあまりか程に」(五五⑨)

〔四六オ・行間・注②中〕

これは甘あまりのほどをさしていまなくとせあまりといへる歎 札記には十年を幼といひ廿を弱といひ三十を壯といへりされは此君たち壮年のよはひにのみみてそなに事もしりきはめ給へきといふ心にや

項一二九(四六ウ・割書) 増補注記 116～117

① 増補本文 《なにかしか：わらひおはさうす》

116 〃すきたはめらむ(五五⑨) 〔四六ウ・割書・増①中〕

数寄撓色めき物めてして心つよからぬなり

117 〃おはさうす(五五⑩) 〔四六ウ・割書・増①中〕

おはしますもおはしまさへとあるはおはします也

項一三〇(四六ウ・本行) 増補注記 118

① 別081引 「中将なにかし：かたりをせむとて」

② 別081注 「しれ物とは常に：といふ心にや」

118 「しれ物」(五五⑬) 〔四六ウ・割書・注②末より〕

白物夕顔事

項一三一(四六ウ～四七オ・本行) ※増補注記ナシ

① 別082引・注

項一三二(四七オ・割書) 増補注記 119

① 増補本文 《たのむにつけて：ありきかし》

119 〃たのむにつけてはうらめしと思ふ事もあらんと(五六②) 〔四七オ・割書・増①中〕

世中のうきはなへてもなかりけりたのむかきりのうらみられける

項一三三（四七オウ・四七ウ・本行）※増補注記ナシ

①別083引・注

項一三四（四七ウ・割書）増補注記120

①増補本文《かうのとけき…さりし比》

120 かうのとけきにをたしくて久しくまからさりし比

（五六⑦）

〔四七ウ・割書・増①中〕

四君にあひし比なるへし

項一三五（四七ウ・四八オ・本行）※増補注記ナシ

①別084引・注

項一三六（四八オ・割書）※増補注記ナシ

①増補本文《後にこそき…心ほそかりければ》

項一三七（四八オ・本行）※増補注記ナシ

①別085引・注

項一三八（四八オウ・四八ウ・本行）増補注記121

①別086引「さてその文の詞…なかりきや」

②別086注（イ）「山かつのかきほ…なてしこの露」

③別086注（ロ）「さてその文…あはれなる物にや」

121 「山かつ」（五六⑭）

〔四八オ・割書・注②末より〕

山かつとは物おもひしらぬ者を云也と俊頼シホシライか口傳に書たりされはこの人はうきを思しりけりとは見えしとしのひければ山かつとはよめるにや万葉には山里人と書て山かつとよめり奥儀抄には下人シモとかけり止観抄には山左ヤマカツとあり又左兒サマカツともかきほとは垣本垣カキね同心也

【備考⑧】本来の別086注は所引和歌「山かつの」ではじまるが、伊地知本では、その和歌が注記部分から切り離され、本項の引用本文に組み入れられている（スペース一字を挟んで別086引部分の末尾に）。

項一三九（四八ウ・四九オ・本行）※増補注記ナシ

① 別 087 引 「おもひ…物語めきておほえ侍し」

② 別 087 注 (前半) 「れののうら…云出ぬ儀也」

項一四〇 (四九才・本行) 増補注記 122

① 別 087 注 (後半イ) 「さきましる…物そなき」

② 別 087 注 (後半ロ) 「咲ましる…にていへる也」

122 「常夏」 (五七④) 「四九才・割書・注②末より」

とこなつとは祐盛スガモリ云染殿の后おさなくおはしましける時みめかたちうつくしくおはしましければなてしことつけたてまつりけりその御名をさらむとてとこ夏とはいふといひつたへたり大鏡の裏書云染殿大后少オサクテ時容姿絶麗トヨシヨウサハセツレイナレハ号ナデコト二瞿麦ニクワマク御取ミトリ美艶ヒユンキコエ耳ミミ今改イマカエ二瞿麦ニクワマク一稱シヨウ二常夏花ニジョウカハナ一蓋避諱ケタシサルイミナ云云なてしこの名いとおほきこゆいまの哥の心はいもわかぬるところにそへてしくものなしとよめりといふは床の字也又床ともかけり

【備考⑨】伊地知本では項一三九の別 087 注の、所引和

歌「さきましる」で始まる後半部分を独立させている。

その和歌部分を独立した本項の引用本文として扱い、それに続いてきた注記部分を(字下げを施して)その注記本文としている。

項一四一 (四九才ウ・本行) 増補注記 123

① 別 088 引 「やまとなてしこ…おやの心をとる」

② 別 088 注 (前半) 「なてしこを…おもしろくや」

123 「やまとなてしこ」 (五七④)

「四九ウ・割書・引①末より」

から頼八生ゆなてしこにたいして日の本ニッポンのなてしこ也或云やまとなてしこは家の前のなてしこ也万葉には屋前石竹オクゼセキナクとかきてやまとなてしこヤマトナテシコとよめりこれにひめ君をたとへたるなり

項一四二 (四九ウウ・本行) ※増補注記ナシ

① 別 088 注 (後半イ) 「打はらふ…来にけり」

②別088注（後半ロ）「おほかたの…かなしくや」

【備考⑩】伊地知本では項一四一の別088注の、所引和

歌「打はらふ」で始まる後半部分を独立させている。

その和歌部分を独立した本項の引用本文として扱い、

それに続いていた注記部分を（字下げを施して）その

注記本文としている。

項一四三〈五〇オ〜五〇ウ・割書〉増補注記124〜128

①増補本文《とはかなけ…にはあらん》

124 「さすらふらん」〔五七⑩〕〔五〇オ・割書・増①中〕

伶俦又龍鐘 たよふなと云心也

125 〃やくなき（五八①）〔五〇オ・割書・増①中〕

無益也又役と心うへき所もあり事にしたかふへし

126 「かたおもひなりけり」〔五八①〕

〔五〇オ・行間・増①中〕

イセノウミ

127 〃むねこかるゝタも（五八③）

〔五〇オ・割書・増①中〕

千思千腸熱 一念一心焦燃

128 「くさはひ」〔五八⑨〕

種也 〔五〇ウ・行間・増①中〕

項一四四〈五〇ウ〜五一オ・本行〉増補注記129

①別089引「吉祥天女を…みなわらひぬ」

②別089注「是は世中の女…よしをいへるなり」

129 「吉祥天女をおもひかけむとすればほうけつきくす

しからむこそ又わひしかりぬへけれとて」〔五八⑨〕

〔五〇ウ〜五一オ・割書・注②末より〕

法氣付天女ナレハ佛法メカシク醫師毒ナト、テ物キ

ラヒナトスルヤウナラムト云也 吉祥天女とは多門

天王の后妃也コウヒ專福徳自在モヘラの法門につかざとりて閻浮提の衆生を利益するかゆへに法氣つきてと云坎其形殊妙にして餘の天女にすぐれたりされは昔くらまへまいるけるそう吉祥天女を思かけたる事ありけりくすしからんとはけしうたうとからんこそといふ心也又或説云吉祥天女の事四天王経云乃往過去に王ありき四大香王と名つく一の女子あり遊好女といふ天女也時に四國に各ひとりの王あり東は藥王南は藥光西は明達北は田といふこの四王遊好女をとらむとすその時に好女忽然としてかくれたりこれよりいぬぬの方四十七万八千九百里をすきて大海の龍王にとられて海のそこにありその時父王四國王大海に入て好女をえて本國にかへるといへりおもひかけたる本説この事にやと云。

項一四五〈五一オ・割書〉※増補注記ナシ

①増補本文《式部か所に：おもひめぐらすに》

項一四六〈五一オ・本行〉増補注記130

- ①別090引「また文章の生に：なむ見給へし」  
②別090注「是は藤式部：下の詞あらはなり」

130 また文章の生に（五八⑬）〔五一オ・割書・引①中〕

進士なりといへり

項一四七〈五一オ・割書〉増補注記131

①増補本文《かの馬頭の申：いひよりに侍しを》

131 系なま／＼のはかせはつかしく（五九②）

〔五一オ・割書・増①中〕

或記云生とかきてなまとよめりあたらしき心也と云。  
されはこの女初心ならんはかせにはまされりといへる也

項一四八〈五一ウ・本行〉増補注記132〜133

①別091引「おやぎゝ付：とけてもまからす」



② 別 091 注 「二道とは文集：あらむと云儀也」

〔五一ウ・本行・注②中に本文化〕

聞君欲取婦意如何文集中吟

132 「我ふたつの道うたふをきけ」(五九⑤)

〔五一ウ・割書・引①末より〕

文集 琴中吟に置レ酒 テリ 満 ニ 玉壺 一 聴 三 我哥 二 兩ノ

途 一 云心也 又云我ふたつの道とは父の家に居は孝

心あるへし男の家に居住せは嫂仕せよと云心也と云

されはわかむとかける本はかなはさる坎

項一四九 (五一ウ) (五二オ・割書) ※増補注記ナシ

① 増補本文 ≪かのおやの心：かた侍めれは≫

項一五〇 (五二オ・本行) ※増補注記ナシ

① 別 092 引 「をのこしも：物は侍める」

② 増補本文 ≪と申せは≫

③ 別 092 注 「をのこ程よき物は侍らすの心なり」

〈参考 08〉 項一四八 本文②

② 二道とは文集に富家ノ女ハ易ク嫁 ヲシテハ早ク輕クニ

其ノ夫ヲ一貧家ノ女ハ難ク嫁シ ヲレハ晩ク孝アリ於レ姑ニ

此 〔兼生〕 133 〈聞君欲取婦意如何文集中吟〉 此心は我女は貧家な

れと御ためには切に孝あらむと云儀也

【備考⑩】 朱の横線で消されている「此」は、増補注

記 133 の挿入箇所の真下に新たに書かれたと見える。

項一五二 (五二オ・本行) 増補注記 134 135

① 別 093 引 「月ころふひやうをもきに」

② 増補本文 ≪たへかねて≫

③ 別 093 注 「腹痛などいふ事にや」

133 「我ふたつの道うたふをきけ」(五九⑤)

134 「ふひやう」(六〇〇⑧) [五二オ・割書・増②末より]

風病也

138 ふく(六〇〇⑧) [五二ウ・行間・引①中]

服

135 「ふひやう」(六〇〇⑧) [五二オ・割書・注③末より]

大論に對治門を尺して云譬へは熱藥は於テハ<sup>ニ</sup>風病<sup>ニ</sup>

為<sup>レ</sup>藥<sup>ト</sup>於<sup>テ</sup>ニ<sup>ハ</sup>余病<sup>ニ</sup>非<sup>ス</sup>藥<sup>リ</sup>若<sup>シ</sup>輕<sup>ク</sup>治<sup>ル</sup>藥<sup>ハ</sup>於<sup>テ</sup>ハ<sup>ニ</sup>熱

病<sup>ニ</sup>為<sup>ス</sup>藥<sup>ト</sup>於<sup>テ</sup>ニ<sup>ハ</sup>余病<sup>ニ</sup>非<sup>ス</sup>藥<sup>リ</sup>佛<sup>法</sup>治<sup>心</sup>亦<sup>如</sup>是<sup>ノ</sup>と云

是ノと云

139 こくねつのさうやくをふくして(六〇〇⑧)

[五二ウ・割書・引①末より]

ひるは草の中にくすりなれば草藥とよむへしと云

又或人云飲佛三昧経下<sup>ニ</sup>善集経によりて云大蒜及雜

五辛<sup>ヲ</sup>を食<sup>セ</sup>る人は九十日そのかうせずといへりすて

に経文に雜五辛ととかれたれば雜藥ともよむへき故

ひるも藥草なれとかのくさきにより雜藥と下す故

項一五三(五二ウ・本行) 増補注記 136~140

① 別 094 引 「こくねつのさうやくをふくして」

② 別 094 注 (イ) 「さうやくはひる…用る物にや」

140 「さうやく」(六〇〇⑧) [五二ウ・割書・注②末より]

草藥蒜也延喜式云八十種草藥廿<sup>四</sup>種。藥<sup>之方</sup>云中<sup>ニ</sup>蒜是

極熱草藥也

136 こくねつ(六〇〇⑧) [五二ウ・行間・引①中]

極熱

項一五四(五二ウ・割書) ※増補注記ナシ

137 さうやく(六〇〇⑧) [五二ウ・行間・引①中]

草藥

① 増補本文 《いとくさきにより…をつかひて》

項一五五（五二ウ・五三オ・本行）増補注記 141

①別094注（ロ）「さゝかにの…あやなざ」

②別094注（ハ）「心は此香…と云なり」

141 「さゝかにのふるまひ」（六一①） 蹶

〔五三オ・割書・注②末より〕

くものふるまひと云事は稚淳毛ワカヌモフタハノ二院皇子の九女衣通姫を允恭天皇藤原の宮に別殿屋をつくりてすましめ給ける比帝しのひて幸ミユキして見給をしらすしてひとり

みつゝみかとをこひたてまつりてくものふるまひかねてしるしもとよめりし哥の心也内典に蜘蛛掛クモイ吉事

来といふことを思てわかせこかくへきよひ也（兼ハ生ラ）とよ掛

こふ由也 又右大将通房かくれ給てのちかの帳のうちにくものいへをつくりけるをよみ給ける北方（土御門右大臣）

わかれにし人はくへくもあらなくなにとふるまふさゝかにそこは 又ふるまふと云字を翔シヤウとかけり曲礼室中不云（フカセヒ）

蟪キ子シトカケリサカニ

【備考⑫】伊地知本では項一五三の別094注の、所引和

歌「さゝかにの」で始まる途中部分を独立させている。

その和歌部分を独立した本項の引用本文として扱い、それに続いて注記部分を（字下げを施して）その注記本文としている。

項一五六（五三オ・割書）※増補注記ナシ

①増補本文「いかなる…侍りぬるにおひて」

項一五七（五三オ・本行）※増補注記ナシ

①別094注（ニ）「あふ事の夜を…からまし」

②別094注（ホ）「心あらはなり」

【備考⑬】伊地知本では項一五三の別094注の、所引和歌「あふ事の」で始まる末尾部分を独立させている。

その和歌部分を独立した本項の引用本文として扱い、それに続いて注記部分を（字下げを施して）その注記本文としている。

項一五八（五三才く五三ウ・割書）増補注記142～145

①増補本文《さすかにくち…せちゑなど》

し

142／おいらかに（六一⑤）  
〔五三ウ・割書・増①中〕

眞實ニト云心也誠に云心坎老人は事うるはしければ  
云坎此詞所とにあり同心也

143／すへて男も女もわるものは我わつかにしれるかた  
のことを残なく見せつくさむと思へるこそいとおしけれ  
（六一⑧）  
〔五三ウ・割書・増①中〕

智者言未必不盡也 論語

144 三史五經の（六一⑨）  
〔五三ウ・割書・増①中〕

史記 漢書 後漢書史三

周易 札記 毛詩 左傳 尚書

145 「とち」（六一⑬）  
〔五三ウ・割書・増①中〕

共也わかきとち女とちわれとちなといへるみなおな

【備考⑭】元々、項一五八の増補本文の末尾に、書き

分けもなく、左の数行（割書の本文とその中二ヶ所さ  
らなる割書の注記）が続いた。

／さ月のせちゑいそきまいるあした（割注）五月  
五日の節天皇あやめのかつらをかかけ給て武徳殿に行  
幸あり内弁外弁等節会のことし宮内省菖蒲内侍女蔵  
人続命縷を群臣にたまふ三献をはりて六府騎射の事  
あり～なにのあやめも思しつめられぬに（割注）  
このあやめはあやめもしらぬ恋もするかなの哥（六六）  
の心とおなし出仕を大事と思へるによりて其外の事  
は心につかぬよしなり～えならぬねをひきかけ

しかしながら五三ウ第十行の途中で文字が突然に切  
れ、「さ月のせちゑ…ねをひきかけ」三行ほど本文と  
注記共々、朱の縦線で悉く打ち消されている（「にて」  
二字の取り消し線だけは異なつて朱の横線）。なお、  
この抹消部分とほぼ一致する内容が、項一五九の引用  
本文と注記部分（前半）に存する（参考09）参照。

一五九（五四オ～五五オ・本行）増補注記 146～149

① 別 095 引 「さ月のせちゑ…いとなみにあはせ」

② 別 095 注 「五月五日の節…詩を作りて」

〈参考 09〉 項一五九 本文①～②

① さ月のせちゑにいそきまいるあしたに何のあやめ  
もおもひしつめられぬにえならぬねを引かけ九日え  
んにまつかたき詩の心を思ひめくらしいとまなきお  
りに菊の露をかこちよせなとやうのつきなきいと  
なみにあはせ

② 五月五日の節には天皇あやめのかつらをかけ給  
て武徳殿に行幸ありて内弁外弁等節会のことし宮  
内省献菖蒲内侍女藏人統命縷を郡臣にたまふ三献  
をはりて六府騎射の事ありなにのあやめも思ひ  
146  
へしつめられぬにこのあやめはあやめもしらぬ恋も  
するかなの哥の心とおなし 147 かくるおりふし大や  
け事に心思ひしつめぬ儀也 147 へ出仕を大事と思へ  
るによりて其外の事は心につかぬよしなり へえな

らぬねを引かけとはえんならぬねと云心也五日に  
はえんなる事なれとかゝるいそかはしきおりには  
えむならぬ心なるへし九日のえんに先かたき詩の  
心をおもひめくらすとは重陽の宴には天皇南殿に  
出御ありて内弁外弁等あり文人博士等をめされて  
題をたてまつらしめておの／＼韻の字をさくりに  
詩を作りて 148 へ文臺かけて人々哥よみかくる事也の上にて講する也

146 「何のあやめもおもひしつめられぬに」(六二⑤)

〔五四オ～五四ウ・本行・注②中に本文化〕

しつめられぬにこのあやめはあやめもしらぬ恋もす  
るかなの哥の心とおなし

147 「何のあやめもおもひしつめられぬに」(六二⑤)

〔五四ウ・本行・注②中に本文化〕

出仕を大事と思へるによりて其外の事は心につかぬ  
よしなり

148 「詩」(六二⑥) 「五四ウ・本行・注②中に本文化」

かけて入るイ、昔よみかぐる事也イ本  
文臺の上にて講ずる也

③別096注「哥なとよみかけ…にいへるなり」

項一六一〈五五ウ・本行〉※増補注記ナシ

149 「九月えんに」(六二⑥) 「五五オ・割書・注②末より」

九月九日のえむとは 月令曰重陽クワツリヤウの日菊に黄花あり

周易云天數九秋數九相應仍曰重陽云、汝南シヨナンの桓景クワツケイ

費長房ヒつけて云この秋九月九日に家にわさはひきた

るへしすみやかに家をさりて家人をしてきぬの袋フツクロに

茱萸シユユをいれてひちにかきさせてたかき所に昇ノボリて菊花

の酒をのみ菊をかさしてゐ給へといひければをしへ

のまゝにたかき山にのほりてかへりて見るに家の中

の猪鷄チヨ犬牛羊キヤウヤウ一時にしにけりと云、是も蒙求注に見え

たり かたきしの心とは 難字ナシの詩也けに人さまお

りふしなどをよくおもひわくへき事なり

項一六〇〈五五オ・本行〉※増補注記ナシ

①別096引「さならても…あるへき事の」

②増補本文《そのおりに…心をくれて見ゆ》

①別097引・注

項一六二〈五五ウ・五五オ・割書〉※増補注記ナシ

①増補本文《すへて心に…あかし給つ》

項一六三〈五六オ・本行〉※増補注記ナシ

①別098引・注

項一六四〈五六オ・割書〉増補注記150〜151

①増補本文《かくのみ…くらくなるほとに》

150 「中納言の君中務」(六三⑦) 「五六オ・割書・増①中」

葵上つかひ給ふ女房たち也

151系／あなかまとてけうそくによりおはすいとやすらか

なる御ふるまひなりや（六三⑩）「五六オ・割書・増①中」

かしかまし山の下行さゝれ水あなかま我もおもふ心  
あり六帖

項一六五（五六オ・五七オ・本行）増補注記152

①別099引「今夜は中神：侍けりとときこゆ」

②別099注「左のおとゝの：神を云といへり」

152 「中神」（六三⑫）「五六ウ・五七オ・割書・注②末より」

中神日ふたかり 又一夜回天一神也私云手習にいとせはく  
むつかしくもあれはゐてたてまつるへきに中神ふた  
かり忌へかりければ宇治の院と云シ所思出て二三日  
やとらむと云やり給へりと云、二三日とあるは一夜め  
くりにはあらざる歎

なかゝみの事或説には天一神は十二神將をまへうし  
ろにたてゝ仲にある神なれば仲神也といへり猶不審  
にて或陰陽師にたつね侍りしかは天一俗謂之在所さた  
まらすして日めくりをし給神也或は日こにしたかひ

て五日六日天上には十六ケ日如此めぐり給其うへ神  
の長にてましますあひた長神ナカカミと名申歎云とされは  
長神ともよむへきにや

天一神世俗所稱奈加  
神御神歎

金櫃経云 天一立中央為十二神時定吉凶断事者也

如此文者中の字無不審歎件方忌事古今所遠来也説安家

永久四年十二月二日縫殿不頭賀茂家榮依法成寺殿作

令注進云天一方俗ニ謂フ之長神ナカカミ巳酉日在ウシトウシレ良六ケ日

乙卯日在キトノレ卯カノヘトラニ五ケ日庚寅日在タツミレ巽六ケ日丁丑在ヒツノウシレ

西トリニ五ケ日壬午日在ミツノヘムマレ乾イヌキニ六ケ日戊子日在ツツクヘレ子ヨリシノトミニ五ケ日

自关ツツクヘトヲ巳日至戊刀ニ日并十六日在天上ヘル経ニ日教之遠説本

九条殿御記云天慶七年正月七日太政大臣從十二月廿八

日至昨日合八ケ日閉門物忌仍巳時參殿天慶六年十二月廿八日正月同七  
年正月六日卯賀家説

項一六六（五七オ・割書）増補注記153

①増補本文《さかしれいは：わたりなる家なむ》

153 （本） 中川のわたりなる家なむ（六四①）

〔五七オ・割書・増①末で改行して字下げ〕

今の京極河也見テニ李部ヲ記ニ古人稱シヨク中河ト云法成寺

の始はみな人中河の御堂といひけり在リ二行成の卿の記

ニ権記にも世継にも見えたり 御堂関白御記ニ中河

のわたりに御堂立とあり関白は土御門と二条との間

八町をさして中河と云也榮花物語云中河邊御堂をた

てらる東法北院也寺今案賀茂河謂東河桂川為西河仍京極河ヲ

謂中河坎 又或説には中河とは堀川なりともいへり

項一六七〈五七オ〜五七ウ・割書〉増補注記154〜156

①増補本文《このころ水…ゐてさけのむ》

154 「しそきて」(六四⑤) 〔五七オ・割書・増①中〕

退也

155 「なめけなる」(六四⑦) 〔五七オ・割書・増①中〕

滑無礼私云なむめけなると可読

156 「おまし所」(六四⑨) 〔五七オ・割書・増①中〕

寝殿也史記云むしろ也

項一六八〈五七ウ・本行〉※増補注記ナシ

①別100引・注

項一六九〈五七ウ十六五オ・割書〉増補注記157〜159

①増補本文《ほと君は…なれなといふにも》

157〔朱〕きぬのをとなひあさやかた。はら〜ときこえて (六五⑤)

〔五七ウ十六五オ・割書・増①中〕

夏もひとへかさねは打衣又はかまきるゆへに音ある

へしむかしはすゝしにねりひとへをかさねたる故に

有音はりひとへと心うへしうち〜もはりひとへか

さねひねりかさねなどをきければなつもはら〜と

きこえる也 當時も事とあるおりはきる也と云と

【備考⑩】伊地知本は増補注記157の「…むかしは」で

改丁するが、次丁の五八オより六四ウまで錯簡が起こ



り、当注記は六五才から続く。なお、錯簡直後の行頭は「うち／＼もはりひとへ」ではじまる。それに先行する「すゝしにねりひとへをかさねたる故に有音はりひとへと心うへし」の部分は、同筆でもやや薄い墨で、六五才の右端、喉近くの余白に書かれている。

158／<sup>(主)</sup>むつかりて（六五⑦） 「六五才・割書・増①中」

怨<sup>ワシ</sup>とかきてむつかるうらむあたともよめりあたとはかうしををそくおろすとにくむ心也

159<sup>(主)</sup>よすか（六五⑩） 「六五才・割書・増①中」

便私云よすかさたまると云は人の女なとまうくる事を云也資也日本記にイン因とかけり

項一七〇（六五才／＼六五ウ・本行書）※増補注記ナシ

①別101引・注

項一七一（六五ウ・割書）※増補注記ナシ

①増補本文 ≪ことなる事なければきゝさし給つ≫

項一七二（六五ウ・本行）※増補注記ナシ

①別102引 「式部卿の宮の…ゆかめてかたる」

②増補本文 ≪もきこゆ≫

③別102注 「式部卿宮は…すくにもかたらぬ也」

項一七三（六五ウ・割書）増補注記160

①増補本文 ≪くつろき…はかりまいれり≫

160くつろきかましく（六六①） 「六五ウ・割書・増①中」

あは<sup>(主)</sup>らなる也紫明注私云極信に實なるはつゝまやかにつまる也其對してあは<sup>(主)</sup>らに<sup>(主)</sup>仕<sup>(主)</sup>しとけなきはくつろく也仍云坎うちゆるへよ<sup>(兼ハ生)</sup>せういなしといふ心也

項一七四（六五ウ／＼六六ウ・本行）増補注記161

①別103引 「戸はり帳も…さふらふ」

②別103注 「是は我家と…おほえぬ心なり」

161 「戸はり帳」(六六④)

〔六六オ〜六六ウ・割書・注②末より〕

催馬楽の詞に我家はとほり帳もたれたるをといへる  
心也なよけむとはなによりなむといふこと葉な  
りおほかたとはりちやうとは帳のかたひら也錦のは  
りちやうなといふ同事也 或云王氏にて何の王なと  
きこゆる其氏の人／＼の役にてかのにしきの帳を  
かゝけて御門をいれまいらするとかや又とはりあけ  
の内侍とて代のはしめに伯三位の女のまいるといへ  
りこれも王氏也と云。

項一七五 (六六ウ・割書) 増補注記 162

① 増補本文《はしつかたの…すけの子もあり》

162 伊与の子もあり (六六⑦)

〔六六ウ・割書・増①末で改行して字下げ〕

いよのかみをすけといへるは長官も次官も職掌おな  
しき故也諸國守の闕の時はすけ長官の事を取りお

こなふ也故にかよはしてかみを介といへり須戸の巻  
に大貳を帥といへる此例なり

項一七六 (六六ウ十五八オ・本行) ※増補注記ナシ

① 増補本文《あまたある中にいと》

② 別104引・注

【備考⑩】伊地知本の錯簡は六六ウ、別104注の途中まで。  
錯簡により当注記の後半は五八オに続く。

項一七七 (五八オ・割書) ※増補注記ナシ

① 増補本文《さえなとも…申あはれの事や》

項一七八 (五八オ・本行) 増補注記 163〜164

① 別105引「このあね君や…おやさなむ侍と申」

② 増補本文《に》

③ 別105注「このあね君とは…後の親は継母也」

〈参考10〉項一七八 本文③

③このあね君とは小君かあねと云儀也まうとゝは實  
翫しての給へる事也 163 〈尊の字也〉後の親は継母也

163 「まうと」〔五六⑫〕〔五八オ・本行・注③中に本文文化〕  
尊の字也

164 「まうと」〔五六⑫〕〔五八オ・割書・注③末より〕  
真人朝臣など云類也私云真人は尸也姓によりて尸は  
かはる也源平藤橘等は朝臣也坂上は宿祢田便是真人  
其外姓尸多しまつとゝ誦をやはらけてまうとゝ云也  
花宴にあやしうさまかへたるまうとかなとあり石川  
のまうとにおひをとられてからきくみすと云を扇  
をとられてからきめを見ると。あやしうさまかへた  
るといふなり

項一七九（五八オゝ五八ウ・割書）増補注記 165ゝ173  
①増補本文《にけなきおや…ふしたるへき》

165／おやすけ（六七①）〔五八オ・割書・増①中〕  
助及 日本記

166／ふいに（六七①）〔五八オ・割書・増①中〕  
思フホカ 不意 日本記 おもはずといふなり

167 「うけひき」〔六七⑤〕〔五八ウ・割書・増①中〕  
承別也又受也

168／おろしたてんやは（六七⑥）〔五八ウ・割書・増①中〕  
えんなる心ならば老たる父にあてつけんやはと云心  
也

169／いたつらふしとおほざるゝに（六七⑨）〔五八ウ・割書・増①中〕

いかなりし時くれ竹の一よたにいたつらふしをつら  
しといふらん拾

【備考⑱】増補注記 169の「つらし」の「つら」二字は、

「へる」に重ね書きしている。

170／<sup>〔朱〕</sup>ものけ給はる（六七⑫）〔五八ウ・割書・増①中〕

物承也<sup>河海</sup>物のけしきうけ給也人に物申と云ことは也

にそふしたるへき（六八⑤）〔五八ウ・割書・増①中〕

障子は寝殿の母屋南面と北面との中を隔たる障子也  
ちかひたるとは源氏の君の南おもての御ましとちか  
ひたる所をいふなり

171／<sup>〔朱〕</sup>いもうとゞきゝ給つ（六八①）

〔五八ウ・割書・増①中〕

けいつにはあねにてもあれかし女をは男の末にかく  
法也古今序にすさのおのみことを天照太神のこのか  
みといへる天照太神はあねにてましませ共女神たる  
故也

項一八〇（五九オ・本行）※増補注記ナシ

①別106引・注

項一八一（五九オ・割書）増補注記174

①増補本文《人けとをき…人とおもへり》

172／<sup>〔朱〕</sup>心とめてとひきけかし（六八④）

〔五八ウ・割書・増①中〕

年ふれとわすられはてぬ人のうへは心とめてそ猶き  
かれける在伊勢家集

174 「さゝやかにて」（六八⑩）〔五九オ・割書・増①中〕

少と狭と細々許<sup>サイクキヨ</sup>遊仙窟  
ほそくちひさき心<sup>サヤカニシテ</sup>

項一八二（五九オ・五九ウ・本行）※増補注記ナシ

①別107引・注

173／<sup>〔朱〕</sup>女君はたゞこのさうしくちすこしちかひたるほと

項一八三（五九ウ・六〇オ・割書）増補注記175・177

① 増補本文《ともかくも思…給へさらんいと》

175 / <sup>朱</sup>とうもなくて（六九⑬） 「五九ウ・割書・増①中」

動無<sup>クモ</sup>をいふ動せぬことは也をとせぬ心なり

176 / <sup>朱</sup>いつくよりとうて給ことのはにかあらん（七〇②）

「六〇オ・割書・増①中」

取出給也

177 「おほしくたしける」（七〇⑤）

「六〇オ・割書・増①中」

思下也

項一八四（六〇オ・本行）増補注記 178

① 別 108 引「かやうなる…侍るなれとや」

② 増補本文《をしたち給…をまたしらぬ》

③ 別 108 注「心はぬしある…おほめき給ふなり」

178 「をしたち給へる」（七〇⑥） 「六〇オ・割書・増②中」

押立也

項一八五（六〇オウ・六〇ウ・割書）増補注記 179 ～ 181

① 増補本文《うい事そや…なくさめましを》

179 / <sup>朱</sup>なよ竹の心ちして（七一①） 「六〇ウ・割書・増①中」

なよ竹はにかたけ也おれかたき物也清輔云 よのな

かけれはなかよたけといはんとてなよたけとはいふ

也と云

180 / <sup>朱</sup>ありしなからの身にて（七一⑥）

「六〇ウ・割書・注②中」

とりかへす物にもかもな世中をありしなからの我身

とおもはん

181 / <sup>朱</sup>見なをし給のちせもや（七一⑦）

「六〇ウ・割書・増①中」

わかさなるのちせの山の後に又かならずあはんけふ  
ならずとも 万

項一八六（六〇ウゝ六一オ・本行）増補注記 182

① 別 109 引 「いとかうかりなる…まとはるゝ也」

② 別 109 注 「かりなるうきね…ぬる心なり」

182 「うきね」（七一⑧） 「六一オ・行間・注②中」

うきたる心也

項一八七（六一オ・割書）増補注記 183

① 増補本文「いまは見きと…なまめきたり」

183 見きとなかかけそとて（七一⑨）

〔六一オ・割書・増①中〕

それをたに思ふことゝてわか宿を見きとなかかけそ  
人のきかくに古

項一八八（六一オゝ六一ウ・本行）増補注記 184

① 別 110 引 「鳥もしはく…あはたゝしくて」

② 別 110 注（前半イ） 「つれなき…おとろかすらん」

③ 別 110 注（前半ロ） 「とりあへぬ…空蟬の返し」

【備考⑱】 本来の別 110 注は所引和歌「つれなきを」で

はじまるが、伊地知本では、その和歌が注記部分から

切り離され、本項の引用本文に組み入れられている（別

110 引末尾で改行してから）。

184 「しはくなけは」（七二④） 「六一オ・割書・引①中」

奥義抄哥枕などにはしはくは漸々也とかけりやう

やうなくと云也常にはしはくとは数字也しきりに

又たひくなどいふことはといへり又頻申ともか

けりされはしきりになく心欬

項一八九（六一ウ・本行）増補注記 185 〳 186

① 増補注記 185（身のうさを…明る夜は）

② 別 110 注（後半イ） 「とりかさねて」

③ 増補注記186 〈そ音もなかれける〉

④ 別110注（後半口）「も鳥をよそへたり」

〈参考11〉 項一八九 本文①～④

① 185 〈身のうさをなけくにあかて明る夜は〉② とりか

さねて③ 186 〈そ音もなかれける〉

④ も鳥をよそへたり

185 「とりかさねて」(七二⑨)

〔六一ウ・本行・注②前に本文化〕

身のうさをなけくにあかて明る夜は

186 「とりかさねて」(七二⑨)

〔六一ウ・本行・注②に続いて本文化〕

そ音もなかれける

【備考⑩】 本来の『帯木別注』に由来する注記に『源氏

物語』の和歌が引用される場合、伊地知本は度々所引和

歌を独立させている。通常はその和歌部分を独立した項

目の引用本文として扱い、それに続いていた注記部分を

（字下げを施して）その注記本文としている（項

一五五、一五七等参照）。本項においても基本的に同じ措

置が認められるが、今回の和歌引用は断片的だったため

（第四句より「とりかさねて」のみ）、その項目化にあた

り本文が（参考11）のように補完されたのであろう。た

だし、同歌の出典箇所が元々後続する項一九〇の増補本

文のうちなので、これで伊地知本において「身のうさを」

歌は項一八九と項一九〇に、その本文が重複した結果と

なる。

以上の事情を受け、補完された部分は本来の『帯木別

注』にない本文で「増補本文」と考えても差し支えない

が、注記本文の断片引用が補われているほかの箇所（例

えば増補注記101、103、133等）を全て「増補注記」とした

ように、（項目化されているとはいえ）ここもそのよう

に考えた。

項一九〇（六一ウ・割書） 増補注記187

① 増補本文《女<sup>身</sup>のあり…さはかしければ》

187／ことゝあかくなれば（七二⑨）

〔六一ウ・割書・増①中〕

ことゝすればはやく明ぬると云也

項一九一（六一ウゝ六二オ・本行）※増補注記ナシ

① 別111引・注

項一九二（六二オ・割書）増補注記188

① 増補本文《御なをしなど…心ともあめり》

188／にしおもての（七二⑫）

〔六二オ・割書・増①中〕  
屋のうちの事也源氏たつみ方よりわたり給ふ也

項一九三（六二オゝ六二ウ・本行）増補注記189

① 別112引「月はあり明…おかしき明ほの也」

② 別112注「月の光おさまる…侍るへき物也」

189 月はあり明にて光おさまれる物から（七二⑭）

〔六二オ・割書・引①中〕

朝日のいてゝ月の光のきゆるをいふなり

項一九四（六二ウゝ六三オ・割書）増補注記190ゝ191

① 増補本文《なになき空…又も給へり》

190 「あて人」（七四③）

〔六二ウ・割書・増①中〕

妙人あてやかにうつくしき人

191／ぬる夜なければなとめもよはぬ（七四⑩）

〔六三オ・割書・増①中〕

恋しさを何につけてかなくさまん夢たに見えずぬる夜  
なければ

項一九五（六三オゝ六三ウ・本行）増補注記192

① 別113引「あこはしらしな…給ふなめり」

② 別113注「あことは我…の給へるなるへし」



192 「ふつゝか」(七五⑧) [六三ウ・割書・引①末より]

ふつゝかとは ふとしといふ也 又ゆたか也 又富也

項一九六(六四オ)六四ウ・割書) 増補注記 193〜196

① 増補本文《さりとともあこは…うしとおほしたり》

193 御くしげ殿に(七五⑩) [六四オ・割書・増①中]

御しやうそくなとしたつる所なり

194 めいほくと(七六⑨) [六四オ・割書・増①中]

面目也

195 人とさけす(七七⑦) [六四ウ・割書・増①中]

不遠也不離也

196 ふようなるよしをきこゆれば(七七⑭) [六四ウ・割書・増①中]

不用也よもきふにこの宮をはふようの物にといへるも

この心也無要といふなり

項一九七(六七オ・本行) 増補注記 197

① 別114引 「はゝき木の心をしらて」

② 増補本文《そのはら…まとひぬるかな》

【備考⑳】 六五オ〜六六ウは上記【備考⑮】参照)の錯簡部分にあたるため、本項は項一九六からとんで六七オ

に続く。

197 「はゝき木」(七八④) [六七オ・割書・増②末で改行して字下げ]

類字源語鈔云そのはらにはゝき木の杜あり木しけくて

杜の下にてはありとも見えぬ也又説にはゝき木ににたる木ありちかくて見ればうする也私云親行注也可用初

説也

又雪月抄云 文永元年神無月のころあつまより山道にかゝりて都へのほり侍しに信濃國かさこし山の東のふ

もとそのはらふせやといふ所にて見侍しかはまことに

はゞきの様なるすかたにて名もしらぬみやま木どもの  
こす多よりもはるかにさしあかりてたゞひともと見え  
きよそにては其程と見てはる／＼と木しけき中へたつ  
ね行つればいつれともしられすといへりさてありとは  
見えなからあはぬためしにはひきける也この木はその  
はらふせやにおひたるにはあらずふせやの南にあたり  
てはるかなる深山の峯也  
又化したる木といふ説もあり

項一九八〈六七オ・割書〉※増補注記ナシ

① 増補本文《きこえむ…まとろまさりければ》

項一九九〈六七オ・本行〉増補注記198

- ① 別114注 (イ) 「数ならぬふせやにおふる」
- ② 増補本文《名のうさ…きゆるはゞき》
- ③ 別114注 (ロ) 「はしめにしるし侍りぬ」

198 「ふせや」(七八⑥)

〔六七オ・行間・注①中〕

／＼雪のふかき所に作也しなのゝ國雪ふかし

【備考②】別114は、(引・注ともに附載しない伝本も複数)その本来の形で所引和歌「数ならぬ」(の上二句)ではじまる短文の注記を持つが、伊地知本では、欠けた句を補ってそれを独立させている。その和歌部分を独立した本項の引用本文として扱い、それに続いていた注記部分を(字下げを施して)その注記本文としている。

項二〇〇〈六七ウ・割書〉増補注記199

① 増補本文《ときこえたり…おほさるとそ》

199 朱／＼さはれと(七八⑩) 〔六七ウ・割書・増①中〕

さらはさてあれなり

〈参考12〉宗祇奥書 〔本行・六七ウ〕

文明十七のとしふ月のはしめつかた兒女子のために注し侍りさためてひか事おほく侍らんかし

宗祇 在判